

一橋大学ア式蹴球部  
100年史

Vol.1  
沿革



# 一橋大学ア式蹴球部 100年史

Vol.1  
沿革



## はじめに

100年にわたる本書の記録は、  
愛するサッカーに青春を捧げ、  
喜びと悲しみ、汗と涙を共にした  
多くの仲間たちの貴重な財産である。

ページをめくれば ……

あの日、あの時、仰ぎ見た空と雲が、  
たくさんの思い出を引き連れて、  
大切な何かを教えてくれる。

母校、一橋大学ア式蹴球部の  
輝かしい未来のため

本書が大きな糧となることを祈ってやまない。



# 目次

## はじめに

<b>巻頭の辞</b> 緒方 徹（西松会会長 昭49卒） .....	3
------------------------------------	---

<b>祝辞</b> .....	5
-----------------	---

中野 聡（一橋大学長 昭58卒） / 戸田 和幸（監督 元日本代表）

<b>戦歴一覧</b> .....	7
-------------------	---

<b>沿革</b> .....	9
-----------------	---

1. 草創期 .....	10
--------------	----

2. 震災を乗り越えて ～ア式蹴球東京カレッジリーグ～ .....	14
-----------------------------------	----

3. 小平G誕生と黄金時代 ～関東大学サッカーリーグ～ .....	20
-----------------------------------	----

*百年史秘話 ① 《西松会縁起》 .....	24
------------------------	----

4. 伝統は戦争の時代に培われた .....	25
------------------------	----

*百年史秘話 ② 《息子に遺した命のバトン》 .....	31
------------------------------	----

5. 焼け跡からの再建 .....	33
-------------------	----

6. 復活Gで「小平合宿」 .....	39
---------------------	----

◆回想：石井 徹（昭30卒） .....	46
----------------------	----

7. 東京都リーグ発足 ～ 関東2部復帰 .....	48
----------------------------	----

◆回想：佐藤 博子（女子マネージャー 津田塾 昭54卒） .....	56
------------------------------------	----

*百年史秘話 ③ 《ユニホーム》 .....	59
------------------------	----

*百年史秘話 ④ 《シュート板》 .....	62
------------------------	----

*百年史秘話 ⑤ 《西武多摩湖線》 .....	64
-------------------------	----

8. 昭和から平成・令和へ ～ 変革と試練 .....	68
-----------------------------	----

◆回想：金谷 斎（西松会代表幹事 平1卒） .....	79
-----------------------------	----

9. 小平G人工芝化 ～ 未来へつなぐ .....	83
---------------------------	----

*寄付者名簿 .....	90
--------------	----

<b>あとがき</b> .....	92
-------------------	----

## 巻頭の辞

### 緒方 徹 西松会会長 昭49卒

一橋大学ア式蹴球部は、本年（令和3年）創立100周年を迎えました。これまでの部の活動に様々な形で参加してこられた方々のご努力に心から敬意を表します。



大学令により東京商科大学が誕生した翌年の大正10年の春、当時の狭い運動場に6人の先輩が次々と集い、ボールを蹴るようになりました。そして6月頃、前年に誕生したばかりの早稲田高等学院（早大予科）と初めての試合をすることが決まり、学内に大きく掲示しました。この時の「商大蹴球団」、これがア式蹴球部の原点です。ちなみに同年の9月には日本サッカー協会の前身である「大日本蹴球協會」が設立されています。また翌11年には日本初のサッカーリーグ「専門学校蹴球リーグ戦」に参加。明治35年にア式蹴球部が誕生していた東京高等師範（現筑波大学）、東京帝国大学（現東大）、早稲田高等学院と合わせて4校です。この中の一橋、東大、早大は今でも「ア式蹴球部」が正式名称という歴史を有しています。

一方、大正10年の11月には原敬首相が東京駅頭で暗殺され、第一次大戦の処理問題を話し合うワシントン会議が開催されました。いわゆる大正デモクラシーに影が差し始めた頃です。大正12年には関東大震災が発生。神田一ツ橋のキャンパスは廃墟と化し翌13年から予科は石神井の仮校舎に。そして昭和5年に本科が国立へ、8年には予科が小平に移転します。昭和13年には後輩たちの支援のために西松会が発足。昭和に入ってから激動の時代は、ア式蹴球部の活動にも深刻な影響を与え、多くの先輩諸氏が戦火に倒れました。ア式蹴球部の創立メンバーの1人である故松本正雄元最高裁判事は、『60年史』の巻頭の辞で、こう言及されています。

“国の歴史を顧みずしてはサッカーの歴史を語れない。

何と言っても一番の痛恨事は、有為な西松会員多数の戦死者を出したことである。”

そして戦時窮乏期の解散の危機を乗り越えてきた蹴球部について、こんな思いを述べておられます。

“サッカーが好きで集まってきたグループであるが

グラウンドは学生生活における心身鍛錬の道場。

心技体の錬成に精進することが真の人間形成に役立ち、

どれだけ社会人としてプラスになるか計り知れないものがある。”

まさにこの1世紀にわたって、様々な歴史が生まれ受け継がれてきたことが分かります。



小平グラウンドの土には、  
サッカーに打ち込み縦横に走り回った皆さんの汗と涙がしみ込んでいます。  
しかし近年、排水の悪化に拍車がかかり、強い雨が降るとたちまち湖が出現、乾燥すると砂ぼこりが舞うという状態でした。練習や試合に大きな影響が出ていたのはもちろん、大半の大学グラウンドが人工芝化し、都学連がリーグ戦のホームゲームを小平で実施しない事態となっていました。試合の応援のため度々観戦するようになった私たちは、“このままのグラウンドでは後輩たちの苦勞は察するに余りある”と話し合い、西松会幹事団の中で人工芝化に向けた検討に着手しました。中心は故安部裕二君（昭52卒）と倉崎嘉幸君（昭57卒）。検討開始から足掛け10年を経た本年、待望の人工芝グラウンドが実現しました。平成7年卒業の諸君を中心とする西松会担当幹事団の近年の刮目すべき実行力に加え、多くのOB・OG、そのご親族、現役学生のご父母の方々、賛同した部外の卒業生など多くの方々からの貴重なご寄付で出来上がりました。またアメリカンフットボール部の皆さんも同じ目的に向け、精力的に活動してくれました。さらに準硬式野球部も参加してくれました。皆様に衷心より感謝申し上げます。

本書『一橋大学ア式蹴球部100年史』は、西松会新聞編集長の福本浩君（昭52卒）がデータや資料、OBの寄稿を丹念に収集して取材し、創意工夫を加えて編集するという大活躍で、「沿革」と「戦記」の2冊の労作にまとめてくれたものです。深く感謝します。ページをめくる度に先輩たちの熱い思いを改めて感じます。ぜひ目を通してください。

近年の大学サッカー界の状況は激変しています。  
そしてここ2年にわたって、パンデミック・新型コロナの世界的な感染拡大という事態が、私たちの生活や経済、文化などを一変させ、サッカーの環境にも大きな影響を与えました。しかし、この状況に怯むことなく私たちは歩みを進め、歴史を築いて行かなければなりません。大きな困難は変革の原動力に、より良い社会への力になると信じて。  
一橋大学ア式蹴球部の次の100年に向けた思いを新たにして、巻頭の辞といたします。

# 祝 辞

## 中野 聡 一橋大学長 昭 58 卒



ア式蹴球部創部 100 周年を心よりお祝いします。

明治 8 年 (1875) 建学の本学が、大正 9 年 (1920)、東京高等商業学校から東京商科大学に昇格して官立大学としての歩みを始めた翌年、ア式蹴球部は生まれました。神田一ツ橋の猫の額のような校庭で「一人剣術的蹴鞠」を遊ぶ学生の姿からその営みが始まり、百年の時を刻んで今日に到りました。この長い年月を通じて、各界で活躍する 諸先輩の熱いご支援をいただきながら、それぞれの時代の学生が、かけがえのない時間と経験を重ねてきた様子は、本 100 年史「戦記」から鮮やかに読み取ることができます。

また、創部 100 周年に向けて、昭和 9 年 (1934) 以来、ア式蹴球部のホームとなってきた小平グラウンドの人工芝化が、このほど完成いたしました。昭和 58 年 (1983) 卒業の私は、小平分校で前期を過ごしました。このグラウンドでサッカーの授業を受けたり、ぼんやり昼下がりの時間を過ごしたりした思い出があります。その後、平成 8 年 (1996) に国立キャンパスに前後期教育が統合されて小平分校は廃止となり、変わって生まれた小平国際キャンパスは、主に国際学生宿舎として学生諸君が生活する場となるとともに、ア式蹴球部をはじめアメリカンフットボール部、準硬式野球部などの課外活動の舞台となってきました。以来、厳しさを増す国立大学の財政事情からグラウンド整備に予算を投ずることが難しい中で、人工芝環境を整えることができず苦労も多かったと聞いております。そのような中、西松会・アメフト部 OBOG 会、準硬会の皆さんからの募金の呼びかけにより多額の御支援をいただき、人工芝グラウンドを現物寄附いただくことになりました。ここに深く御礼申し上げますと共に、グラウンド完成をともにお祝いをいたします。

昨年からのコロナ禍のなか、課外活動は緊急事態宣言下では停止を余儀なくされ、再開後も全般に厳しい制約のもとにおかれています。幸いにも、学生諸君が市民として責任ある行動に徹した結果として、一橋大学では、これまで課外活動に伴うクラスターの発生を防止することができています。引き続き、現役学生諸君、また支えていただいている OBOG の皆さんやコーチ・関係者の皆さんには、感染拡大防止を徹底しながら部活動の充実を図るという困難な課題に取り組んでいただくことをお願いいたします。

素晴らしい人工芝グラウンドの完成に加えて、監督にサッカー元日本代表の戸田和幸氏が就任するというビッグ・ニュースも飛び込んできました。学生諸君の意気も上がっていることと思います。スポーツを通じて一橋大学ならではの現役・卒業生ネットワークの中で、学生諸君の学生生活が一層心豊かなものになることを期待しています。OBOG の皆さまには、今後とも後輩学生諸君ならびに一橋大学へのご支援をいただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



## 戸田 和幸 一橋大学ア式蹴球部監督 元日本代表

一橋大学という誰もが羨む日本有数の大学に属しながらサッカーと部活動にも高い志と熱量を持って取り組まれてきた数えきれないOBの方々の汗と努力の積み重ねによって今年創部100周年を迎えられた事に心からお祝い申し上げます。

昨年から外部コーチとして関わらせていただく事になり、2021年からは監督という立場で学生たちのサッカーと部活動のサポートをしていく事となりましたが、サッカー一面での個々人の成長とチームとしての成果達成に向けた取り組みはもちろんの事、大学が理念として掲げているCaptains of industryに相応しい人材育成にも今まで以上に真剣に積極的に取り組んでいく事を目標に掲げ、学生たちは日々自身と向き合い仲間と協力して取り組んできています。またOBの方々のご尽力により、小平キャンパス内に素晴らしい人工芝グラウンドを造っていただけただけの事につきましても、この場をお借りして心からの感謝をお伝えしたいと思います。

この記念すべき100周年という節目に部に属し携わっている我々が、どのような選手・学生・指導者・チーム、そして組織として存在する事が出来るか、これまでの100年とこれからの100年を繋ぎ始めていく立場にある者として、我々には大きな使命と責任があると考えています。今日まで多くのOBの皆さんによって作り繋がられてきた伝統を守りつつ、これから飛び込む事になる変化の激しい世界にも意欲的に主体的に、そして今と未来に対して常にワクワクした気持ちを持ちながら挑んでいく事ができる人間になっていくために、サッカーと部活動を通じて、学生たちには日々の活動とトレーニングから目一杯チャレンジしてもらっています。そしてサッカー一面での大目標である昇格に向けては「競技・チームコンセプト・戦術」への理解、そして一橋大学の学生だからこそ目指す事ができる新しいサッカーへの挑戦を始めています。

是非リーグが開幕しましたら新しいア式蹴球部のサッカーを、新しくなった小平グラウンドに観に来てください。OB総会の時にお話しさせていただきました「まるで1つの生き物の様に」そして「持ち得る全ての力を投じて勝利を目指す」サッカーを皆さんに観ていただける事を心待ちにしています。今までとこれからを繋ぐ、そして大切なものを守りながら新しいものを生み出していく、そんなチームとして我々はサッカーのみならず志を高く持って活動していきますので、是非今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

素晴らしい歴史を持つ大学・蹴球部に、そして記念すべき創部100周年に立ち会わせていただけただけの事に心から感謝すると共に皆さんが作り続けてきたものを大切にしながら学生たちが失敗を恐れず、失敗から学ぶ謙虚な気持ちを持って自身の成長に向かって積極的に取り組んでいけるよう、私自身も日々学ぶ姿勢と指導者として存在する意味を忘れずに全力で取り組んでいきます。小平で1人でも多くのOBの方々にお会い出来る事を心待ちにしています。この度は誠にありがとうございました。

# 戦歴一覽

大正10年度(1921)～令和2年度(2020)

<b>草創期</b>		昭和21年(1946)	1部	5位：1勝4敗
大正10年(1921)	初試合 vs 早稲田高等学院	昭和22年(1947)	1部	最下位：0勝5敗
<b>専門学校蹴球リーグ</b> 東高師・東大・早高・商大		昭和23年(1948)	2部	最下位：0勝5敗
大正11年(1922)	最下位：0勝3敗	昭和24年(1949)	3部	優勝：7勝0敗
大正12年(1923)	～ 関東大震災 ～	昭和25年(1950)	2部	4位：2勝3敗
<b>ア式蹴球東京カレッジリーグ</b>		昭和26年(1951)	2部	4 or 5位：3勝1分2敗
大正13年(1924)	2部 5位：1勝4敗	昭和27年(1952)	2部	4位：2勝1分3敗
大正14年(1925)	2部 5位：2勝3敗	昭和28年(1953)	2部	5位：1勝5敗
大正15年(1926)	2部 3位：2勝2分1敗	昭和29年(1954)	2部	5位：2勝4敗
昭和2年(1927)	2部 4位：2勝1分2敗	昭和30年(1955)	2部	6位：1勝1分4敗
昭和3年(1928)	2部 4位：2勝1分2敗	昭和31年(1956)	2部	6位：1勝2分4敗
昭和4年(1929)	2部 4位：1勝3分1敗	昭和32年(1957)	2部	5位：2勝2分3敗
昭和5年(1930)	2部 最下位：勝敗不詳	昭和33年(1958)	2部	4位：3勝1分3敗
昭和6年(1931)	3部 最下位：0勝1分4敗	昭和34年(1959)	2部	4位：2勝2分3敗
昭和7年(1932)	4部 優勝：3勝2分0敗	昭和35年(1960)	2部	6位：1勝2分4敗
昭和8年(1933)	3部 優勝：5勝0敗	昭和36年(1961)	2部	7位：0勝3分4敗
昭和9年(1934)	2部 優勝：5勝0敗	昭和37年(1962)	2部	3位：3勝4敗
<b>関東大学サッカーリーグ I期</b>		昭和38年(1963)	2部	6位：2勝1分4敗
昭和10年(1935)	1部 5位：1勝4敗	昭和39年(1964)	2部	7位：2勝5敗
昭和11年(1936)	1部 5位：2勝3敗	昭和40年(1965)	2部	6位：2勝1分4敗
昭和12年(1937)	1部 最下位：0勝5敗	昭和41年(1966)	2部	最下位：1勝1分5敗
昭和13年(1938)	2部 優勝：5勝0敗	昭和42年(1967)	3部	3位：3勝2分2敗
昭和14年(1939)	1部 5位：1勝2分2敗	<b>東京都大学サッカーリーグ I期</b>		
昭和15年(1940)	1部 2位：3勝2敗	昭和43年(1968)	1部	2位：6勝1分2敗
昭和16年(1941)	1部 4位：1勝2分2敗	昭和44年(1969)	1部	5位：4勝1分4敗
昭和17年(1942)	1部 最下位：1勝1分3敗	昭和45年(1970)	1部	5位：3勝3分3敗
昭和18年(1943)	2部 優勝：3勝0敗	昭和46年(1971)	1部	4位：3勝2分2敗
昭和19年(1944)	～ 戦時休止 ～	昭和47年(1972)	1部	7位：2勝5敗
昭和20年(1945)	～ 戦時休止 ～	昭和48年(1973)	1部	4位：4勝1分3敗

<b>関東大学サッカーリーグ II 期</b>			平成 9 年 (1997)	2 部	最下位：0 勝 3 分 4 敗
昭和 49 年 (1974)	2 部	7 位：3 勝 4 敗	平成 10 年 (1998)	3 部 A	優勝：6 勝 1 敗
昭和 50 年 (1975)	2 部	最下位：0 勝 2 分 5 敗	平成 11 年 (1999)	2 部	6 位：2 勝 1 分 4 敗
昭和 51 年 (1976)	2 部	7 位：1 勝 1 分 5 敗	平成 12 年 (2000)	3 部 B	2 位：5 勝 1 敗
<b>東京都大学サッカーリーグ II 期</b>			平成 13 年 (2001)	3 部 B	5 位：2 勝 2 分 3 敗
昭和 52 年 (1977)	1 部	7 位：2 勝 5 敗	平成 14 年 (2002)	3 部 B	7 位：1 勝 2 分 4 敗
昭和 53 年 (1978)	2 部	優勝：6 勝 1 分 0 敗	平成 15 年 (2003)	4 部 C	優勝：6 勝 1 分 0 敗
昭和 54 年 (1979)	1 部	6 位：2 勝 2 分 3 敗	平成 16 年 (2004)	3 部 B	4 位：3 勝 2 分 2 敗
昭和 55 年 (1980)	1 部	5 位：0 勝 6 分 1 敗	平成 17 年 (2005)	3 部 B	優勝：6 勝 1 分 0 敗
昭和 56 年 (1981)	1 部	最下位：0 勝 7 敗	平成 18 年 (2006)	2 部	4 位：5 勝 2 分 2 敗
昭和 57 年 (1982)	2 部	4 位：2 勝 4 分 1 敗	平成 19 年 (2007)	2 部	9 位：1 勝 3 分 5 敗
昭和 58 年 (1983)	2 部	最下位：0 勝 3 分 4 敗	平成 20 年 (2008)	3 部	3 位：4 勝 3 分 1 敗
昭和 59 年 (1984)	3 部 A	優勝：6 勝 1 敗	平成 21 年 (2009)	3 部	3 位：7 勝 2 敗
昭和 60 年 (1985)	2 部	5 位：3 勝 1 分 3 敗	平成 22 年 (2010)	3 部	3 位：7 勝 2 敗
昭和 61 年 (1986)	2 部	6 位：2 勝 5 敗	平成 23 年 (2011)	3 部	2 位：6 勝 1 分 2 敗
昭和 62 年 (1987)	2 部	3 位：2 勝 3 分 2 敗	平成 24 年 (2012)	2 部	7 位：4 勝 5 敗
昭和 63 年 (1988)	2 部	5 位：2 勝 2 分 3 敗	平成 25 年 (2013)	2 部	4 位：8 勝 6 分 4 敗
平成 1 年 (1989)	2 部	最下位：0 勝 2 分 5 敗	平成 26 年 (2014)	2 部	8 位：6 勝 1 分 11 敗
平成 2 年 (1990)	3 部 A	優勝：5 勝 1 分 1 敗	平成 27 年 (2015)	2 部	5 位：9 勝 1 分 8 敗
平成 3 年 (1991)	3 部 A	5 位：1 勝 4 分 2 敗	平成 28 年 (2016)	2 部	2 位：11 勝 3 分 4 敗
平成 4 年 (1992)	3 部 A	2 位：4 勝 2 分 1 敗	平成 29 年 (2017)	1 部	9 位：3 勝 3 分 12 敗
平成 5 年 (1993)	2 部	7 位：1 勝 2 分 4 敗	平成 30 年 (2018)	2 部	5 位：7 勝 4 分 7 敗
平成 6 年 (1994)	3 部 B	優勝：5 勝 2 分 0 敗	令和 1 年 (2019)	2 部	4 位：9 勝 2 分 7 敗
平成 7 年 (1995)	2 部	5 位：3 勝 1 分 3 敗	令和 2 年 (2020)	2 部	6 位：5 勝 2 分 6 敗
平成 8 年 (1996)	2 部	5 位：3 勝 4 敗			

# 沿革



蹴球部創設六人

氏諸の郎太静藤進 毅石明 治平世藤兵 雄正本松 通村川 ヲヨ右

氏郎次朝橋高 内圓

# 1. 草創期

大正 10 年 (1921) ~ 大正 12 年 (1923)

令和 3 年 (2021) 6 月、一橋大学ア式蹴球部は創立 100 周年を迎えた。

その根拠となる資料は、昭和 9 年 (1934) に創刊され第 9 号まで作られた部誌『蹴球』である。創刊号に寄稿した創立メンバーの 1 人、川村 通 (大 15 卒) によれば「蹴球団」の結成は、大正 10 年 (1921)。当時一橋大学は、予科 3 年・本科 3 年の「東京商科大学」と呼ばれていた (大正 9 年に東京高等商業学校から昇格) 時代だ。川村は結成の経緯を軽妙に綴っている。

“僕等が一ツ橋の學校に入ったのは大正九年だった。その翌春二年に成って氣も落ちつくど、何か自分の營みらしいものが欲しくなる。此の時分であった、猫額大の校庭に体操教官から借用の古びた籠球用ボールを一人で蹴って遊ぶ一壯漢を見出したのは。而も打ち見れば、彼氏聊か年配の高商生 (東京高等商業學校出身) である。食堂の壁に蹴あてし鞠は、轉じて以て學生集會所の窓を襲ひ、鞠を受け鞠を追ひ、縦横無盡の大活躍だ。ロイド眼鏡の奥に人なつこい眼が笑ふ。これが我が兵藤先輩であった。忽ち僕もこの清貧孤獨にして、而も鞍馬山は義經の一人劍術的蹴鞠 (敢て後年の蹴球と分つ) の仲間入りをした。同クラスの明石毅君も一緒であった。さあ、これが妙に面白い。いや蹴るの何の、朝は始業前から蹴る。晝休勿論蹴る。放課後は最も蹴る。日没に至って纔に止む。日曜日にも登校して終日蹴った。従って仲間も日増しにふゑた。そして何時となく氏を呼ぶに「親方」なる名稱を以てする様になった。”



蹴球団創設の恩人 兵藤世平治

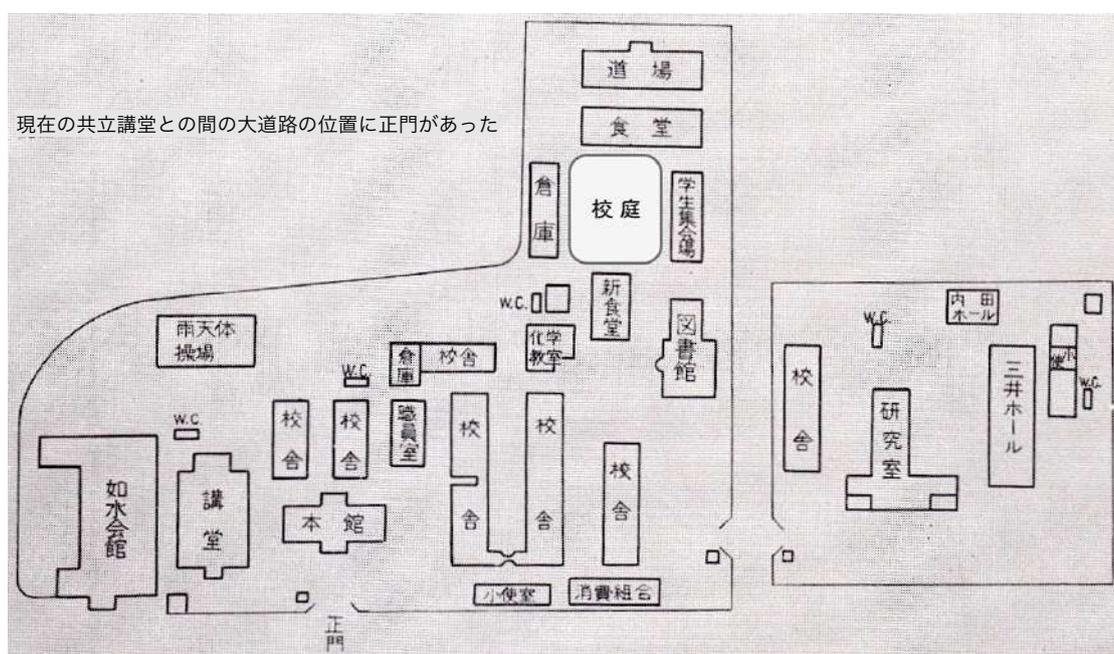


“一味に加わった乾分連の顔ぶれを二三紹介しよう。

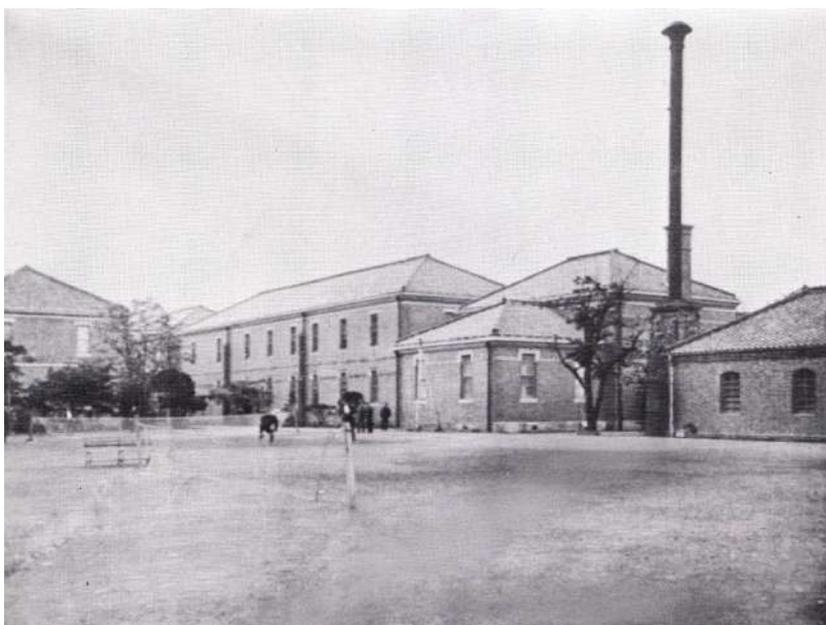
トモさん事、廣島一中出の高橋朝次郎君は、いつも頬に淡く血ののぼった如何にも純真なる少年と云ふ顔だちだった。但し其の蹴つとばす馬力に至っては、眞に凄まじいものがあった。我がマーチャン事松本正雄君の如きは、恰も神宮外苑繪畫館前の芝生の如く美しき三分刈の頭を振り立て、ゆで蛸の如く常に赤面しつつ蹴ったものである。一級上の進藤靜太郎君はエスペランチストであった。だから足のさばきも國際的で傍に見てみた一生曰く「あの男日本人か、いやに蹴りやがるな。支那人だらう」と云う位。”



\*大正9年には大学前の一ツ橋通り(現白山通り)に市電も開通し、「一ツ橋 商科大学前」という停車場もできる



\*兵藤が食堂の壁を相手に  
「一人剣術的蹴鞠」に  
励んでいた「猫額大の校庭」



“其の年の6月頃であつたらうか、大分仲間も出来たから、此際一チーム作って何処かと一試合しようぢやないかと親方が云ひ出した。そこで當時之亦出来たてホヤホヤと云ふ早稲田の高等學院に掛け合つて、高等師範のグラウンドでやるときまつた。景氣をつけようと云ふので親方一流の名文で檄を草したのを、僕等が悪筆を揮つて模造紙何枚かに大書し、生徒控え室に高々と掲げたものだ。

「茲に商大蹴球團を結成し、強敵早大に當らんとするによつて、全學を擧げて來り援けよ」

大正10年(1921)

6月頃、「商大蹴球團」は東京高等師範学校(現筑波大)のグラウンドで、早稲田高等学院(早大予科)を相手に初めての対外試合を行った。布陣は以下の通り。

FW 王・干・兵藤・呉・張 (兵藤以外は全員中国人留学生)  
 BK 明石・高橋・吉野・進藤・川村  
 GK 松本

結果はスコアレス・ドロー。

両校とも、当時は日本人よりサッカーが上手だった中国人留学生をFWに起用し、同じような戦法だったから引き分けたと、川村は記している。

ともあれ、こうして我が一橋大学ア式蹴球部は、正式に産声をあげたのである。

『蹴球』創刊号より



蹴球團第一回の對外試合を終へて

於東高師

### 大正11年 (1922)

この年、日本最初のサッカーリーグである「専門学校蹴球リーグ戦」が行われ、早稲田高等学院（早大予科）・東京高等師範学校（現筑波大）・東京帝国大学（現東大）と共に商大も参加した。しかし、対早高、対東高師の試合はメンバーがそろわず不戦敗。唯一試合が成立した東大にも負けて3敗となり、残念ながら最下位に終わる。

余談になるが、日本で最初にサッカーを体操の教材として取り入れたのは東京高等師範学校で、明治19年（1886）のこと。まだラグビーと未分化の状態であったが、明治35年（1902）に「ア式蹴球部」が創設され、イングランド人の教員が赴任して指導した明治37年からサッカー（Association Football）が行われるようになったと伝えられている。また「専門学校蹴球リーグ戦」に参戦した歴史を持つ、一橋・東大・早稲田の3校は、今でも「ア式蹴球部」を正式名称としている。

### 大正12年 (1923)

4月、商大ア式蹴球部は大学から正式に認められ、若干の部費が出るようになった。しかし9月1日 午前11時58分、思いもよらぬ天災に襲われる。  
関東大震災・・・校舎の大半を消失し、キャンパスは廃墟と化した。



## 2. 震災を乗り越えて ～ア式蹴球東京カレッジリーグ～

大正13年(1924)～昭和9年(1934)

大正13年(1924)

4月から商大本科は、神田一ツ橋の仮校舎で授業を再開する。



予科は、前年12月1日より幡ヶ谷の東京高等学校に仮住まいして授業を再開。

蹴球部は東高のグラウンドで練習を始めていたようだ。

そして、この年の4月1日から石神井に新設された仮校舎に移転したのだが、

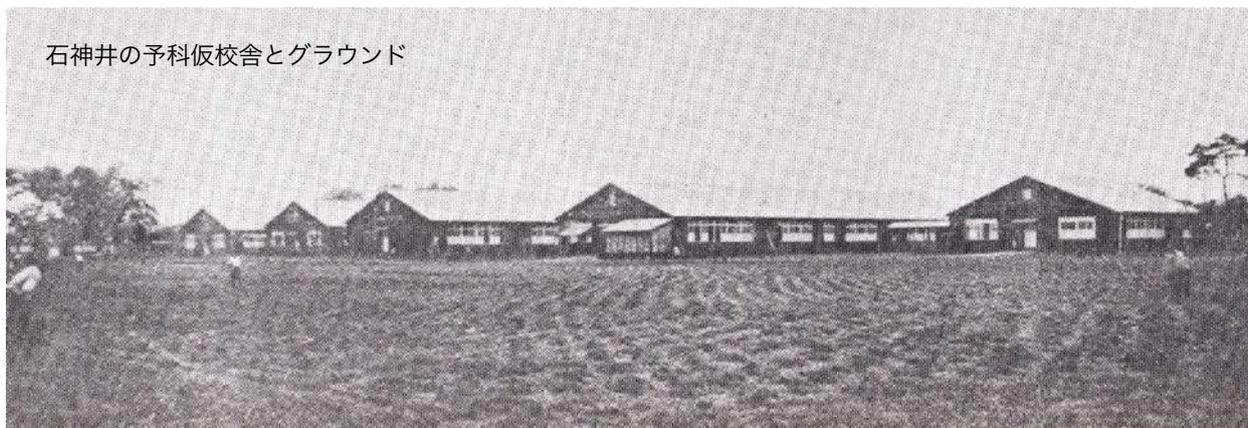
そのグラウンドは、大根畑を整地しただけの劣悪なものだった。

昭和4年に入学入部した二階堂謹二(昭10卒)は、こう記している。

“グラウンドたるや、正に田んぼに類するものであり、一度雨降るや全くの泥濘化し泥田で練習する形となる。また乾き切るや風に煽られモウモウの土煙を巻き起こし砂漠と化す。練習するラグビー部と反面ずつの共用にて当時ラグビーの方が威勢良きため、ややもすれば押され気味にて、ランニングパスが我が陣に乱入することが多く、よく練習を乱される。”

・・・『60年史』より

石神井の予科仮校舎とグラウンド



ラ式蹴球（ラグビー）部



ア式蹴球部



## 大正14年 (1925)

1月半ば、「ア式蹴球東京カレッジリーグ」（現関東大学サッカーリーグの前身）が始まる。東京の大学と専門学校12校が、6チームずつ2部に分かれて戦った。商大はリーグ2部で戦い、東京歯科医学専門学校に1勝しただけで、5位に終わった。

注) 記録的には大正13年度の戦績となる

【大正13年度 戦績】 東京2部：5位 1勝4敗

外語	青学	一高	東歯	明治
● 1-2	● 0-4	● 0-4	○ 3-1	● 1-3

★1部順位：1 早稲田 2 東大 3 東高師 4 法政 5 慶応 6 農大

★2部順位：1 一高 2 明治 3 外語 4 青学 5 商大 6 東歯

その後、東京カレッジリーグは、2年目に「3部制」、8年目には「5部制」に拡大。大学や専門学校にサッカー部が次第に増えていったことが伺える。

商大はしばらく2部で奮闘していたが、昭和5年に3部、6年には4部にまで降格してしまう。この頃の主力は予科の部員が中心で、本科の部員は指導役となっていた。また部の雰囲気も同好会のように練習も11名を欠くことが多く、練習なしで試合に出場する選手もいたという。しかし昭和7年から、まさにV字回復の快進撃が始まる。なんと3年連続でリーグ優勝を果たし、昭和9年（1934）、どん底の4部から一気に念願の1部昇格を成し遂げたのだ。

## 昭和7年 (1932)

リーグ4部 vs 日大 △ 1-1



ア式蹴球東京カレッジリーグ			
大正 13 年 (1924)	2 部	5 位：1 勝 4 敗	1 一高 2 明治 3 外語 4 青学 5 商大 6 東歯
大正 14 年 (1925)	2 部	5 位：2 勝 3 敗	1 農大 2 明治 3 外語 4 青学 5 商大 6 東歯
大正 15 年 (1926)	2 部	3 位：2 勝 2 分 1 敗	1 慶応 2 明治 3 商大 4 青学 5 外語 6 東歯
昭和 2 年 (1927)	2 部	4 位：2 勝 1 分 2 敗	1 明治 2 農大 3 明薬 4 商大 5 外語 6 青学
昭和 3 年 (1928)	2 部	4 位：2 勝 1 分 2 敗	1 農大 2 法政 3 東高 4 商大 5 明薬 6 外語
昭和 4 年 (1929)	2 部	4 位：1 勝 3 分 1 敗	1 一高 2 東高 3 法政 4 商大 5 明薬 6 青学
昭和 5 年 (1930)	2 部	最下位：勝敗不詳	1 農大 2 東高 3 成城 4 法政 5 明薬 6 商大
昭和 6 年 (1931)	3 部	最下位：0 勝 1 分 4 敗	1 立教 2 国学院 3 中央 4 日歯 5 商船 6 商大
昭和 7 年 (1932)	4 部	優勝：3 勝 2 分 0 敗	1 商大 2 日大 3 拓大 4 外語 5 東歯 6 成蹊
昭和 8 年 (1933)	3 部	優勝：5 勝 0 敗	1 商大 2 中央 3 日歯 4 国学院 5 慈恵 6 東工
昭和 9 年 (1934)	2 部	優勝：5 勝 0 敗	1 商大 2 商船 3 明治 4 東高 5 成城 6 法政

昭和 9 年 (1934) 11 月 22 日

リーグ 2 部 最終戦 vs 法政大 ○ 9 - 0 於明治神宮外苑競技場 (現国立競技場)



【昭和 9 年度 戦績】 東京 2 部：優勝 5 勝 0 敗

東高	商船	明治	成城	法政
○ 2 - 0	○ 11 - 3	○ 3 - 1	○ 3 - 1	○ 9 - 0
10/1 石神井	11/3 石神井	11/9 石神井	11/17 石神井	11/22 神宮

→ 東京 1 部 昇格

昭和9年度の主将・二階堂謹二は、当時の蹴球部を次のように振り返る。

“昭和6年、予科キャプテンをやっていた小生は、1年先輩の長瀬と肝胆照らす仲となり、何としても強固なる学校代表チームを創るべきだと夜を日に継いで熟議を重ね、心を砕く。我が蹴球部には、残念ながら歴史浅くして伝統的なものがない。強権、強制、即ち自己の恣意を抑制、犠牲にする事も已むを得ないのではないかと強く識れども、自由束縛を厭う人は次々と離脱する。この激動の真只中、四部への陥落という最も悲惨な運命に否応なしに叩き落とされて了う。翌昭和7年、国立箱根土地グラウンドに於ける夏季合宿時、集合したメンバーは僅か13名を数うるのみ。併し救いは、残存部員、何れも一騎当千の筋金入りのサッカーメンバーであった。之が火の玉となり再興の念に燃え猛練習を重ね、苦戦に苦戦を強いられたるも、優勝という大偉業を辛くも捷ちとることができた。”



“昭和8年に入るや、上昇気運物凄く、再び三部優勝という栄誉を確保した。

学内に於いても蹴球部の存在が認められ、無理なく優秀部員も集って来る。昭和9年度には部内にて紅白試合が出来る状態にさえなる。何の為に蹴球をするか等の問題は今は昔の夢と化し、堂々学校代表選手の自負を持ち、敢えて強制なくとも積極猛練習に参加する。斯くて秋のリーグ二部戦では破竹の勢抑え難く、向う処敵なく悠々全勝優勝を果たす。”

・・・『60年史』より

このチーム躍進の最大の功労者が、長瀬東作（凱昭 改）である。  
 肋膜炎を患いながらも、医者と家族の反対を押し切り、卒業まで練習や試合に参加し、  
 優れた技術と卓越した統率力・ユーモアで部を牽引した。鈴木 彰（昭13卒）は、こう記す。

“たった1人、国立の本科から雨の日も風の日も休むことなく石神井グラウンドに通って  
 指導してくれた長瀬大先輩のことは、決して忘れることのできぬ神にも近い尊い姿であった。”

注) 神田一ツ橋にあった本科は、昭和5年に国立へ移転

・・・『60年史』より



長瀬は昭和9年に卒業し、三菱鉱業に入社。  
 しかし、3年後に病が再発。  
 昭和12年10月21日、この世を去った。  
 蹴球部時代に残した彼の言葉が語り継がれている。

“蹴球部員は皆ボールと恋愛せよ。  
 熱愛せよ。そして女性と恋を語るな ……”



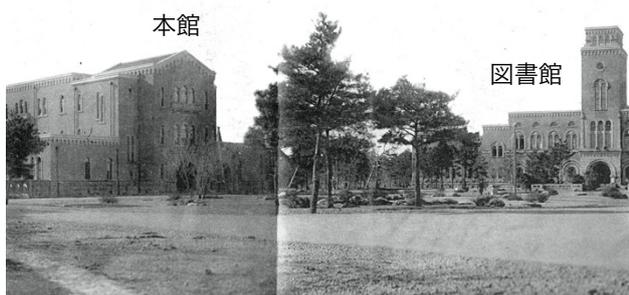
### 3. 小平 G 誕生と黄金時代 ～ 関東大学サッカーリーグ ～

昭和9年(1934)～昭和15年(1940)

昭和5年(1930)9月、本科が神田一ツ橋から国立に移転。

昭和8年8月、予科が石神井から小平に移転する。

しかしグラウンドはまだ使えず、しばらくの間は国立の陸上競技場で練習した。



#### 昭和9年(1934)

春から小平の「サッカー専用グラウンド」で練習をスタートする。

これまで不便と悪条件の中で練習してきた部員は、夢かとばかりに喜んだという。

商大が「ア式蹴球東京カレッジリーグ」の1部に昇格したのは、この年の秋。

小平グラウンドの長い歴史は、歓喜の中で始まったのだ。

#### 昭和10年(1935)

11シーズン続いた「東京カレッジリーグ」が大学と高等専門学校のリーグに分離し、現在に続く「関東大学サッカーリーグ」がスタートした。

リーグトップの1部に参戦した商大蹴球部は、部員の数が増え、

部の運営・練習方法などに新たな工夫が必要となる一方、自信が高まり、伝統が芽生え始めた。

昭和8～9年頃  
建設中の小平予科キャンパス

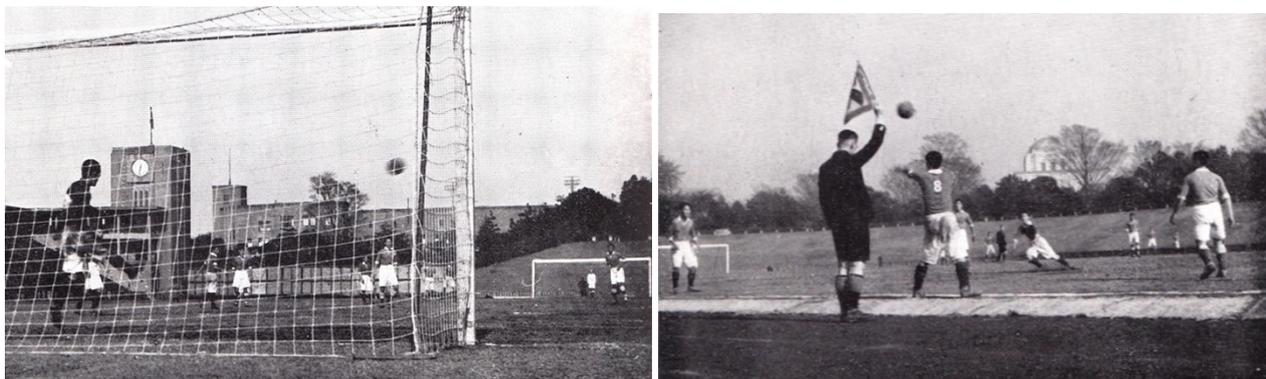


昭和10年（1935）10月6日 関東大学サッカーリーグ開会式 於明治神宮外苑競技場



昭和10年（1935）  
於小平グラウンド

昭和12年（1937） 於明治神宮外苑競技場



関東大学サッカーリーグ I期			
昭和10年(1935)	1部	5位：1勝4敗	1 早稲田 2 東大 3 文理 4 慶応 5 商大 6 立教
昭和11年(1936)	1部	5位：2勝3敗	1 早稲田 2 慶応 3 文理 4 東大 5 商大 6 農大
昭和12年(1937)	1部	最下位：0勝5敗	1 慶応 2 東大 3 早稲田 4 明治 5 文理 6 商大
昭和13年(1938)	2部	優勝：5勝0敗	1 商大 以下順位不詳：千葉医 拓大 慈恵 立教 法政
昭和14年(1939)	1部	5位：1勝2分2敗	1 慶応 2 早稲田 3 東大 4 明治 5 商大 6 農大
昭和15年(1940)	1部	2位：3勝2敗	1 慶応 2 商大 & 早稲田 4 東大 & 文理 6 明治

昭和15年（1940）

この年は、一橋大学ア式蹴球部100年の歴史において記念すべき年となった。強豪の東大・早稲田・明治を破り、早稲田と同位ながら「関東リーグ1部 準優勝」の栄誉に輝いたのである。これは我が部史上最高位の記録で、今も破られていない。総部員は50名を超え、最上級生（本3）が9名、下級生にもFW松岡（本1）やBK松浦（予1）など優秀な選手がいたことが好成績の最大の要因で、まさに黄金時代であった。



【昭和15年度 戦績】 関東1部：準優勝 3勝2敗

東大	慶応	早稲田	文理	明治
○ 1-0	● 1-3	○ 2-1	● 2-4	○ 4-0
10/6 神宮	10/19 神宮	10/27 御殿下	11/10 東伏見	11/17 御殿下

当時予科3年生で、FWとして試合に出場していた土屋五郎（昭18卒）は、平成8年に刊行された追悼文集『松本正雄大先輩を偲ぶ』の中で、昭和15年度の偉業を振り返り、以下のように綴っている。そこには、我が部のあるべき姿が示されている。

“当時は戦時下ではありましたが、諸先輩のお陰で、関東大学リーグの一部の檜舞台で試合が出来た恵まれた時代でした。併しそれなりに練習は非常に厳しいものでしたが、一方で「試合は選手だけのものではなく、サブから先輩も含めた全員の闘いである」ことが強調され、その気風が全員に漲っていました。従って、小平の練習には壮気溢れる先輩方がよく来られ大分しごかれたものでした。又、松本先輩も大きな試合には必ず来られ、試合後のミーティングでは種々話をされ、我々を鼓舞激励して下さいました。

また、サブの方等も多く、六年間を地味な裏方の役に徹された方も少なからず居られました。今でも、試合の時にグラウンドの外からじっと見つめて居られた《あの人》《この人》の澄んだ光る瞳が、目に浮かびます。此の様に、当時のサッカー部は《グラウンドの内も外も》一つになっての試合であり、又練習でありました。

当時一部で三強と言われた早大や東大を破ったことがありましたが、この時、「商大は技の劣勢を果敢なる闘志と、旺盛なる団結力で覆した」と、どの新聞にも書かれたものですが、松本先輩は、此の記事を、我が意を得たりとばかりに喜ばれました。そして「之こそ、我が商大サッカー部なり」と誇らしげに胸を張られ、我々を鼓舞激励されたことがつい昨日の様に思い出されます。”



## 百年史秘話 ① 《西松会縁起》

一橋大学ア式蹴球部OBの団体「西松会（ゆうしょうかい）」は、いつ、どういう経緯で発足したのか・・・『松本正雄大先輩を偲ぶ』巻末の年譜によると、“昭和13年、商大ア式蹴球部OB会を西松会と命名す。撰名者は、大正十五年卒 川村 通氏。”

詳細は不明だが、昭和12年にチーム再建の功労者、長瀬東作が亡くなったことが発足のきっかけとなったと思われる。病身でありながら生活の一切を蹴球部に捧げた彼の精神に感応し、OBが後輩を支援する組織「西松会」を結成。それを全面的に後援したのが、創立メンバーの松本正雄と川村 通だった。その名の由来について、川村いわく・・・

“「西松」なんという熟語はもちろんだ。つまり新発明だ。一字ずつの意味ならば、「西」というのは成熟する、稔る、又は、老ゆということ、それに方角を示す字としては、西という意味をもつ。「松」はいうまでもなく松の木のこと。そこで「西松」と続けて、城西の国立（宮城のほとんど真西にあたる）なる母学の庭の老松ということから、学窓を離れて世に出てもいつまでも変わらぬ同志の心にたとえてみた。”

さらに川村は、明治天皇が詠んだ歌

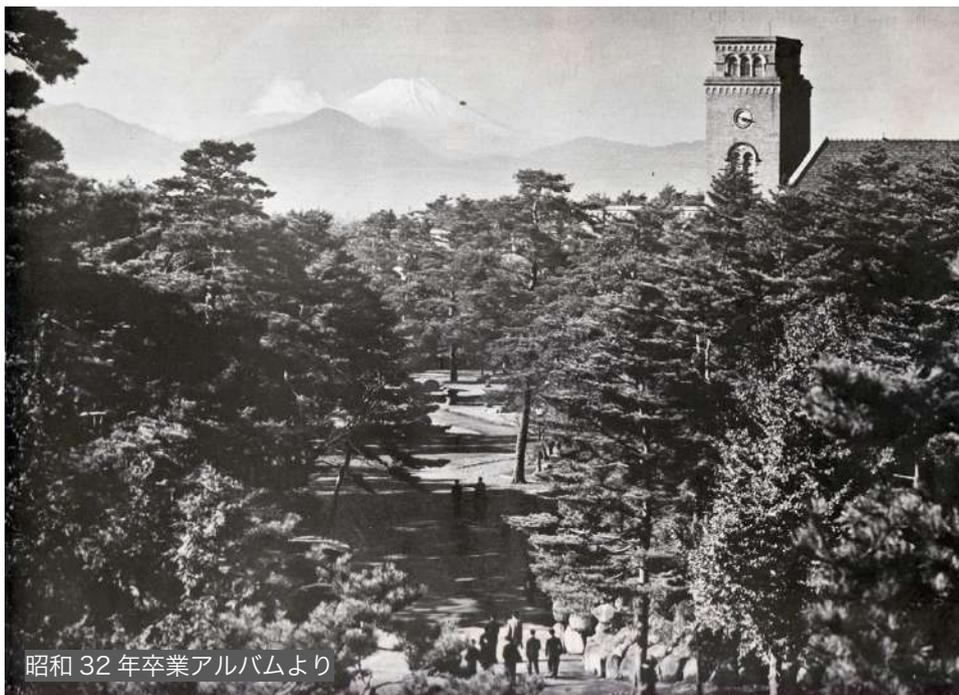
「すみし世にかわらぬものは昔より老いたると見し松ばかりにて」や昔の「蹴鞠」は競技場の四隅に松の木を植えたことにも因んだという。

発足から84年・・・

「西松会」に込めた大先輩の深い思いを、もう一度かみしめたい。



川村 通



昭和32年卒業アルバムより

## 4. 伝統は戦争の時代に培われた

昭和15年(1940)～昭和20年(1945)

昭和15年、商大蹴球部は史上最高位の記録を打ち立てた。  
しかし、その黄金期は、戦争の時代でもあった。

昭和12年に日中戦争が始まり、昭和16年には太平洋戦争に突入、  
そして終戦に至る間、多くの先輩たちが戦場で命を落とした。  
昭和14年刊の部誌『蹴球』第6号は、  
中支戦線で戦病死した荒井文雄(昭12卒)の追悼号となっている。  
この激動の時代を、年代を追いながら詳しく辿っていこう。



### 昭和15年(1940)

学生の徴兵は26歳まで猶予されていたが、徐々に戦時色が部の活動に波及してきた。  
ユニホームはペラペラのスフ(staple fiberの略で化学繊維のこと)で、  
サッカー靴も牛皮から豚皮になる・・のちには馬皮、ついには鮫皮に。

“ボールはさすがに牛皮だったが、練習の時のボールは皮が薄くなって倍くらいに膨れ上がった代物。軽くて大きいため蹴ってもスピードが出ず、風が強いとあらぬ方向に流されていく。極端に言えば風船玉の固いものと思えば良い。”

・・ 鷺埜 和夫(昭19卒)『60年史』より

### 昭和16年(1941)

この年の関東1部リーグ戦は、9月28日に明治神宮外苑競技場で開幕。  
最終戦は11月2日で、その1ヶ月あまり後の12月8日、日本は太平洋戦争に突入した。  
すでに学生の徴兵猶予は撤廃され、本年10月には大学・専門学校の修業年限が3ヶ月短縮される。  
その結果12月に卒業となった学生を対象に徴兵検査が行われ、合格者は翌年2月に入隊。  
大学生にとっては、卒業即軍隊生活の時代になっていく。

### 昭和17年(1942)

予科の修業年限も6ヶ月短縮され、9月卒業、10月入隊の措置が取られる。  
このため毎年秋に行われていた関東大学リーグ戦は、春に実施されることになった。  
3月末に合宿し3試合ほど練習試合を行い、4月29日に開幕というあわただしい空気の中、  
商大は奮闘むなしく最下位となり、関東2部に降格してしまう。



出征直前の荒井文雄



荒井兄の遺品



荒井兄



### 昭和18年 (1943)

4月、戦局の激化に伴い、予科の修業年限が2年となる。

5月に行われた関東2部のリーグ戦に参加したのは、わずか4校。

商大は3戦全勝して見事1部復帰を果たす。



10月には卒業までの徴兵猶予も撤廃され、20歳以上の文科系学生が在学途中で徴兵される。そして10月21日、関東大学サッカーリーグの試合会場だった明治神宮外苑競技場において、7万人に及ぶ関東地方の入隊学徒の「出陣壮行会」が挙行された。

運動部にも数々の制約が加えられ、ラグビー以外の外来スポーツが禁止になる。

蹴球部は冬から「滑空班（グライダー部）」として活動し、再びボールを蹴る日に備えて体力の維持増強に努めたというが、『60年史』には密かにボールを蹴っていたと思われる記述もある

“我々は部生活の根を残すことを考え、サッカー部を中心として滑空班を組織した。

ところが練習用のプライマリーグライダーは第1回の練習で壊れてしまい、修理に出したはずが遂に戻ってこなかった。

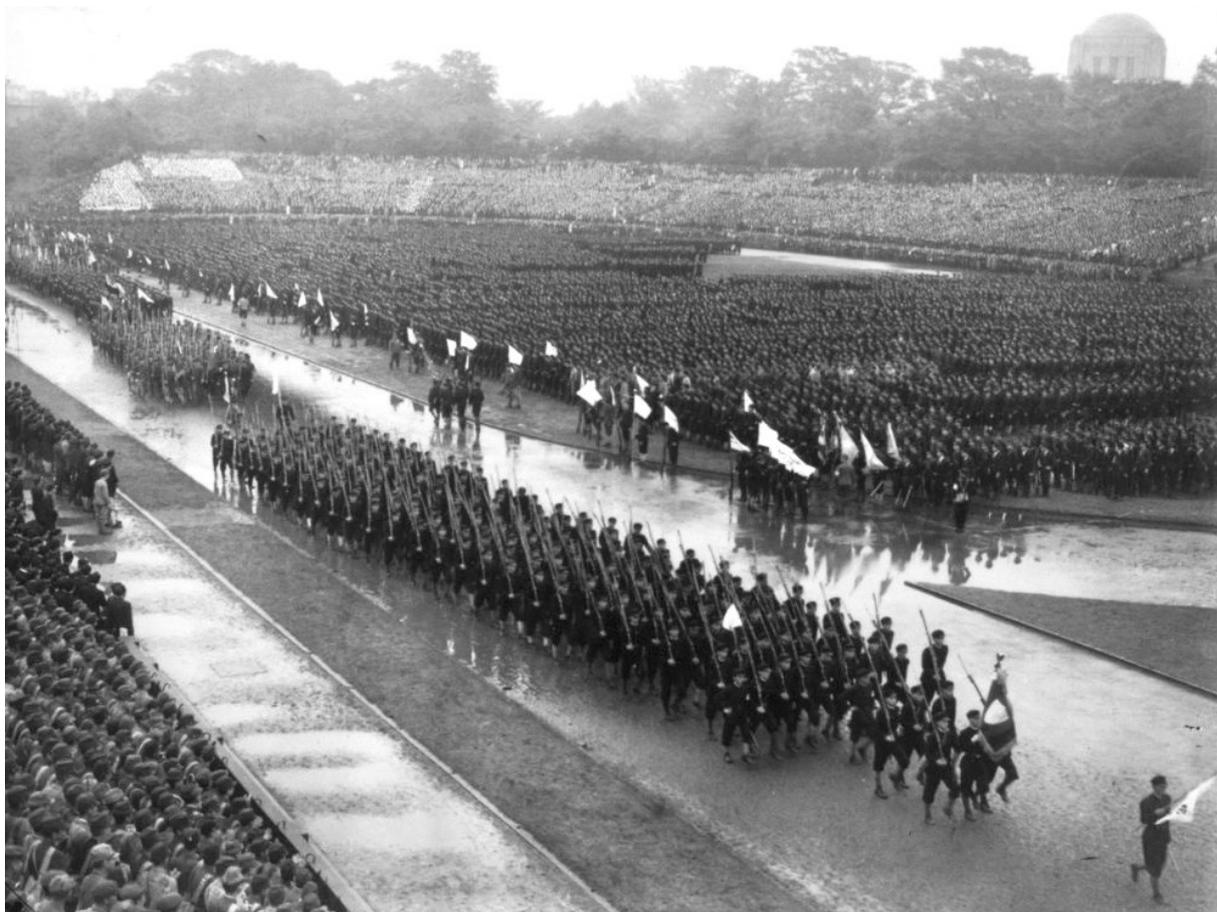
私たちは保管してあったボールを持ち出してサッカーを始めた。

靴も不足していたので全員裸足で蹴っていたが、それで結構面白かった。”

・・・高柳 晋（昭23卒）

関東大学サッカーリーグ I期			
昭和 15 年 (1940)	1 部	2 位：3 勝 2 敗	1 慶応 2 商大 & 早稲田 4 東大 & 文理 6 明治
昭和 16 年 (1941)	1 部	4 位：1 勝 2 分 2 敗	1 東大 & 早稲田 3 慶応 4 商大 5 立教 6 文理
昭和 17 年 (1942)	1 部	最下位：1 勝 1 分 3 敗	1 東大 2 早稲田 3 明治 4 慶応 5 立教 6 商大
昭和 18 年 (1943)	2 部	優勝：3 勝 0 敗	1 商大 以下順位不詳：法政 農大 東工
昭和 19 年 (1944)			～ 戦時休止 ～
昭和 20 年 (1945)			～ 戦時休止 ～

昭和18年10月21日 「出陣学徒壮行会」 於明治神宮外苑競技場



徴兵検査



## 昭和19年（1944）

3月に小平の予科校舎が軍に接収され、学生は国立へ。

以後、運動部の練習の本拠は国立の陸上競技場と野球場になる。

しかし「出陣学徒壮行会」以降、学生が続々と入営して蹴球部員はわずか7～8名となり、事実上チーム編成が不可能になった。他の大学も同様の状況でリーグ戦は中止となる。

やむなく休部を決意した部員たちは、創立メンバーの1人であり、後輩たちを物心両面で支えていた大先輩、松本正雄（大15卒）に相談したが、ひどく叱られたという。



昭和18年1月31日  
鎌倉鶴岡八幡宮にて  
出征部員の武運長久祈願

松本正雄  
(元最高裁判事)



戦後、昭和26年に復刊された部誌『蹴球』に、松本自身が当時を振り返りながら記した文章がある。

“私は即座に「廃められるものなら廃めてみよ、不心得者は退きがれ！」と大喝一声したのを覚えている。「松本さん、あとのことは頼みます」と部の後事を託され、「よし引き受けた」と大部分の西松会員を戦地に送った私であった。祖国に捧げた一身は、明日の命も全く計り知れないのに「一橋蹴球部健やかなれ」と念ずる気持ちを伝えてくれた。私としては首を切られても「蹴球部を廃止するのもやむを得ない」など男として言えないことであった。”

部員たちは一旦引き下がったが、どうすることもできなかった。

昭和19年の夏休みを過ぎる頃から本格的な勤労働員が行われ、部活動は完全に停止した。

9月、東京商科大学から「東京産業大学」に改称。

11月24日から翌年の終戦の日まで、アメリカ軍による東京空襲が100回以上も続いた。

## 戦争の時代・・

部員たちは先輩の戦死に泣き、自身の応召を待ち、窮乏に耐えながら戦ったが、サッカー部廃止の瀬戸際まで追い詰められる。それでも今につながる一橋大学ア式蹴球部伝統の気風は、この戦争の時代に培われていった。昭和14年に商大予科に入学した鷲埜和夫（昭19卒）は、『60年史』にこう記している。

“大変きつい練習だったが、当世言われるシゴキとは別世界であった。きびしい中にも和やかで、のびのびとしたふんい気があり、それでいて良き秩序が保たれていた。

もともとあまり健康ではなく、また部に入るまでボールを蹴ったことがなかったので随分苦痛に感じたものである。それが最後まで続いたのは、やはり言うに言われぬサッカー部のふんい気であり、友情であったと思う。

おそらく部員の中で最も下手な、そして最もだらしない一員であったと思うが、その後の人生で心の支えになったのは、この時代のサッカー部の生活であったことは間違いない。”

昭和14年度部員 小平部室前



## 百年史秘話 ② 《息子に遺した命のバトン》

『60年史』巻末の西松会会員名簿には、戦死あるいは戦病死された先輩が10名記載されている。その中の1人、神野光司（清一郎 改 昭11卒）と彼のひとり息子にまつわる秘話を紹介したい。

神野は、昭和5年（1930）に入部。当時の商大蹴球部は低迷の極にあり、昭和6年には東京カレッジリーグの4部にまで転落した。しかし翌年から3年連続でリーグ優勝し、昭和9年に1部昇格を果たす。この映えあるチームをけん引した1人が、神野だった。

卒業後、昭和13年に神野は中支戦線へ出征。昭和19年には沖縄へ。そして終戦間近だった昭和20年6月20日、戦死した。その時、彼には生後1歳余りの息子がいたのだ。名前は、<sup>ただし</sup>匡司。

戦後、神野匡司さんの母は夫の末弟に再嫁し、匡司さんは叔父の養子となる。父の情報は一切封印されたまま育てられるが、中学生の頃、祖母が涙ながらに真実を話してくれた。しかし、その後も匡司さんは母と養父に気を使い、何も知らないふりをして生きてきた。ただ「父の戻る場所」を守りたいという気持ちから、頑なに引越しを拒み、戦前と同じ場所に住み続けた。それが奇跡のような出会いを招き寄せた。平成30年（2018）、長年にわたって一橋大学の戦没学徒を調査している「一橋いしぶみの会」の代表・竹内雄介氏（昭49卒）が、記録に残っていた住所を頼りに匡司さんの自宅を探し当て、神野光司の大学時代の姿をつぶさに伝えた。



父・清一郎がサッカー部員で、輝かしい成績を収めたこと、在学中に改名し「光司」と名乗っていたこと、自分の名の1字をとって、息子の名前に付けたこと、それは匡司さんにとって  
 齢75にして初めて知る父の姿だった。

令和2年7月31日、戦後75年目の夏、匡司さんは小平グラウンドを訪れた

父・神野光司がボールを蹴っていた頃から80年以上の歳月が流れ、サッカーコート的位置も周囲の環境も全く変わったが、歴代部員の汗と涙が染み込んだ小平の土だけは変わらない。

戦後 75 年目の夏、

匡司さんは、父が愛した小平グラウンドに初めて立った。

その手には、父が毛筆でしたための息子誕生の記録があった。



“知ることが許されなかった、そして遅まきながら知ろうとした時には既に遅いと諦め掛けていた父の生前の面影に触れることができ、「一橋いしぶみの会」には感謝の念に堪えない。

父が確かに生きていたこと、自分の中にその血が受け継がれていることを実感し、齢七十五を過ぎた身ながら、「生まれて来て良かった」という喜びを噛みしめている次第である。父が遺してくれたこの命のバトンが子や孫に、そしてその先にも続くようにと心から願っている。”

・ ・ 神野匡司「父・神野清一郎に捧ぐる記」より

## 5. 焼け跡からの再建

昭和20年(1945)～昭和21年(1946)

昭和20年(1945) 8月15日 終戦

軍隊から戻った加藤 省(昭23卒)は『60年史』で、こう振り返る。

“東京は見渡す限りの焼土であった。はるか向こうまで眼をさえぎるものさえなく、焼跡特有の異様な臭気が立ち込めていた。昔盛り場であった処には闇市が立ち、戦時中影をひそめていた物資が売られており、活気に満ちていた。しかし肩で風をきって歩く進駐軍や闇屋とは対照的にぼろをまとった人々の眼には生気がなかった。使命感に燃えて出陣した我々学徒兵にとっては、この祖国の変わり方は精神的に大きな衝撃であり、敗戦の悲哀をいやという程味合わされた。将来に対する希望すら失いかげながら、国立に復学届を出しに行き、赤松の林の間に懐かしい校舎を見、グラウンドのゴールポストを見た時は胸が熱くなるのを禁じ得なかった。軍隊で夢にまで見たものが、そのままそこに残っていたからである。”



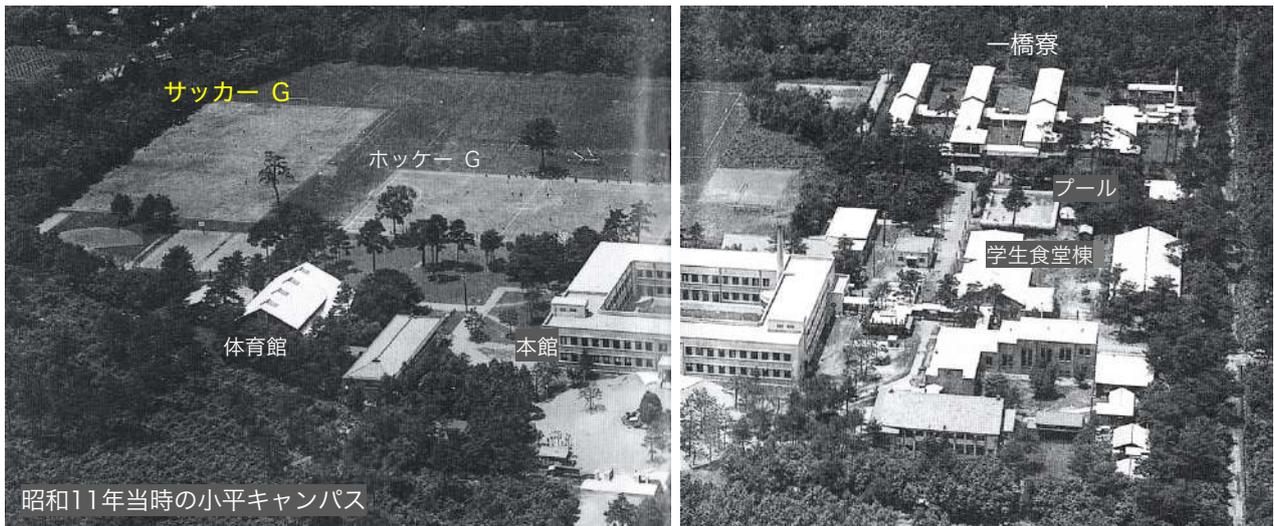
昭和20年3月10日  
東京大空襲直後の隅田川畔  
(現在の墨田区両国付近)

牛込市ヶ谷付近



一方、軍に接収されていた小平予科キャンパスは、すでに5月25日の空襲で一橋寮が焼失し、グラウンドは探照灯などの兵器が放置されたままで、とても練習ができる状態ではなかった。また戦後の食糧難の中、耕されて農園となっていた時期もあり、運動場として再び使えるようになるまでには、7年もの歳月が必要だった。

昭和11年と昭和22年当時の写真を比べてみると、その惨状がよくわかる。またグラウンドには、畑の畝のようなものがあることが見てとれる。



昭和11年当時の小平キャンパス



昭和22年撮影 国土地理院空中写真より

## 昭和21年 (1946)

春からサッカー部の再建が始まった。

“練習を始めようや”・・・そう皆に声をかけたのが、松浦 巖 (本3) だった。

松浦は、昭和13年の全国中学選手権 (現高校選手権) で優勝した神戸一中のCHとして活躍。昭和15年に商大予科に入学すると即レギュラーになり、関東1部準優勝に大きな貢献をした。技術は勿論のこと、信頼と包容力を感じさせる頑健な肉体と、にこやかな風貌を持ち、誰からも愛された。通称「がんさん」。

松浦 (予3当時)



昭和18年 於小平グラウンド



さらに加藤の記述を続ける。

“ボールを蹴り、走ってみて現実の厳しさをいやという程感じた。

第一に腹がへってどうにもならぬし、身につける物は軍隊のシャツであり、地下足袋であり、用具類は無に等しかったからである。そうするうちに秋にはリーグ戦が再開されることになり巖さんの本格的な部再建運動が始まった。空き腹をかかえて練習した後で、松本さんはじめ諸先輩に援助をお願いし、資材の調達に走り廻ったのであるから、その苦労は並大抵のものではなかっただろう。戦前の学部生としては唯一人残られ、部再建については使命感を持って居られた。卓抜とした指導力と、稀にみる包容力を発揮され、我々後輩に部再建の苦労を殆ど気付かせなかった。”

小平グラウンドが使用できない中、松浦の発案で国立にある陸上競技部の部室の2階を借り、9月中旬から1ヶ月の合宿を行った。食料は芋が主食で、また合宿費を稼ぎ出すために全員で倉庫会社の荷役のアルバイトに行くなど今では想像できないような苦労があったが、弾も飛んで来ない、空襲もないグラウンドでボールを蹴る喜びは、すべての困難を凌駕していったという。



秋、関東大学サッカーリーグが再開された。神宮競技場が進駐軍に接収されていたため、試合は東京帝大の御殿下グラウンドで行われる。各チームとも選手不足が深刻だったので、この年は大学院の学生も出場できることになった。

我が部は「東京産業大学」として関東1部で戦ったが、チーム編成に大きな問題を抱えていた。もともと他大学に比べて部員が少ない上に地方出身者が多く、折からの住宅難・食糧難が彼らの上京を殆ど不可能にしていたのだ。幸いにも専門部の学生や、松本高校出身、東京外語出身の学生の参加も得て、ようやく体裁を整えた。しかし質量とも劣勢なのは否めず、1勝4敗で5位。かろうじて1部に残留するのが精一杯だった。

【昭和21年度戦績】 関東1部：5位 1勝4敗

早稲田	東大	文理	慶応	立教
● 1-3	● 0-8	● 1-2	● 0-5	○ 2-0

★順位：1 早稲田 2 東大 3 文理 4 慶応 5 東産大 6 立教

ここで戦後のチーム再建を牽引した松浦が、部誌『蹴球』第9号に寄せた文章を紹介したい。昭和17年、予科3年の松浦は主将としてリーグ戦を戦ったが、チームは最下位に沈み、関東2部に降格してしまう。その時の気持ちを率直に綴っている。

“予科の人に言ひたい事は、皆其々種々な苦しい事に出遭ふ時があるだろうけれども其を押し切ってやっていくものは何か、其は蹴球と蹴球部に対する愛であり、其は何処から出て来るかは、其の人があくまで部に練習に喰付いて自分を投げ込んでやるの他はない。良く云ふ様に蹴球部の生活は実践の生活である。肉体を以て実感を得るより他はない。真剣にやった者にして始めて得られる事である。

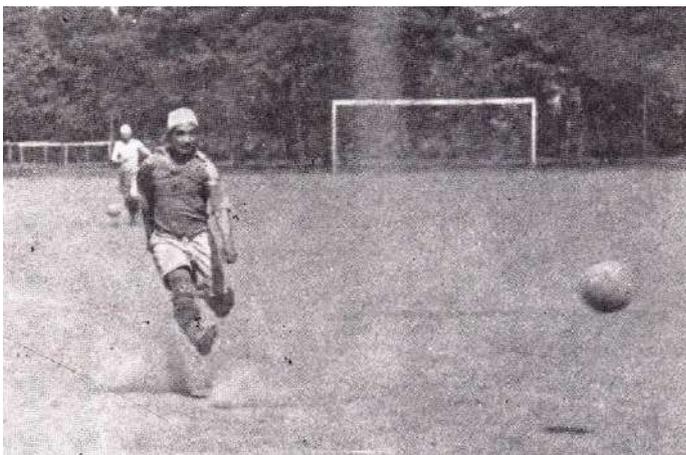
自分にとって苦しかった予科時代を省ると、一年に入った時は何の悩もなく過した。リーグ戦の戦跡も見事なものであった。二年になってもっと本当に勉強しなくてはならない。蹴球だけで此の学校時代を過ぎて良いのかと云ふ反省が起きた。二年の終に予科の主将の責任を新しく負った。何とかして自分の生活に安心の行く落ち着いた道を見出したいと云ふ気持ちと、主将としての重大な責任と、又春に変わったリーグ戦の猛練習とで喘ぎ喘ぎの気持ちであった。

一層の事はっきり部を辞めて自分のやりたい勉強にじっくりひたりきるべきかと考へた事もあった。しかし其には自分の気持ちに絶対許せぬものがあつた。そんな事で夜眠られない時も度々あつた。では何がさうさせないのか、俺という人間の内に蹴球部が食い込んである。生活の中に完全に融けてある。其を棄てる事は自分が半分に裂かれるのも同然だと云ふ気持である。

人は其の人なりに其々苦しみを持っているが、あっさり簡単にやめて行けるのが自分には羨ましい気持ちもした。此んな気持ちでゐた為皆を引張って行く事も出来ず、又病気になつたり足を挫いたりして部全体に全く詫びのしようのない濟まない事をしてしまった。二部に落ちたのは凡て自分の責任であると本三の方々の顔を見る度に心の底で刺される様な気持ちがする。

何か勉強をやってゐると云ふ安心に陥つてゐる事は情無いことである。と同時に何か練習をやってゐると云ふ漫然たる気持は恐ろしい。吾々は蹴球部と云ふ真に自分の一身を投込んでやる行動の場を持ってゐる。本当に自己を捧げ切って行動する場を持たない人間は、ロボットの様な存在だ。此の烈しい時勢の中にあつて、且又日本の将来を決すべき時にあつて本当に働くものは、真に行動する場を通じて体験され、生み出されて来たものでなければならない。吾々の練習も勉強も部生活も此でなくてはならないと思ふ。”

## 昭和17年 予科3年次の松浦



「がんさん」は、誰よりも1部優勝を願い、厳しく自己を律し、そして、誰よりもサッカーと商大蹴球部を愛した男だった。  
昭和55年（1980）11月28日、兼松江商の社長在任中に急逝。享年59。

振り返れば、我が部は幾度も危機に見舞われた。  
しかし幸いにも、強い使命感と責任感を持ち、  
その危機を乗り越えようとした部員とOBの存在が常にあった。

後輩たちを物心両面で支え続けた創立メンバー、松本正雄。  
病を押して部をどん底から救った、長瀬東作。  
部の再建に全身全霊を捧げた、松浦 巖。

彼らがいなかったら、一橋大学ア式蹴球部100年の歴史は  
まったく違ったものになっていただろう。  
3人の偉大なる先輩に、心から感謝の気持ちを捧げる。



## 6. 復活 G で「小平合宿」

昭和 22 年 (1952) ～ 昭和 42 年 (1967)

### 昭和22年 (1947)

東京産業大学から、旧名の「東京商科大学」に戻る。

チームの中核であった松浦の卒業の穴は大きく、また戦後の急激なインフレや食糧難による混迷は、フルメンバーでの練習をますます困難にした。リーグ戦は全敗で最下位となり、関東2部に降格。以後、我が校の名前は関東リーグ1部から消える。

### 昭和23年 (1948)

レギュラー8名が卒業したため状況はさらに悪化し、主将も不在で

一時は部の存続すら危ぶまれる最悪の事態となった。結果2部でも全敗し、関東3部に降格。

### 昭和24年 (1949)

学制改革が行われ、6:5:3:3 から 6:3:3:4 に移行。

それに伴い、東京商科大学から「一橋大学」に改称される。

サッカー部は予科生が主体となり、よく耐え、よく忍び、2部復帰を果たした。

10月15日 関東リーグ3部 開会式



“3部転落の憂き目を何とか晴らしたいという全員の熱烈なファイトが盛り上がり、年間を通じて長雨の泥濘戦ではあったが、5戦5勝 2不戦勝の戦績を挙げ、ついに待望の2部昇格を果たすことができ、全くの感無量の一言に尽きた。特に3部の中にはやくざ風の者もあり、試合を投げてグラウンドに坐りこむ奴もいて全くサッカーを侮辱するものと憤慨に堪えず、この点からも3部脱出は商大サッカー部のプレステイヂの為にもよかったと思った。”

・・・『60年史』より

### 昭和27年 (1952) 春

小平の「サッカー専用グラウンド」が、ついに復活する。  
 まだ土がブカブカだったため、練習の前に砂をまき、  
 戦時中の軍の忘れ物である重い「転圧機」を引いて締めるのが日課だった。  
 当初はホッケー部のグラウンドを使わせてもらうこともあり、  
 完全な状態になるまでには1年以上かかったという。

### 昭和28年頃の小平合宿風景

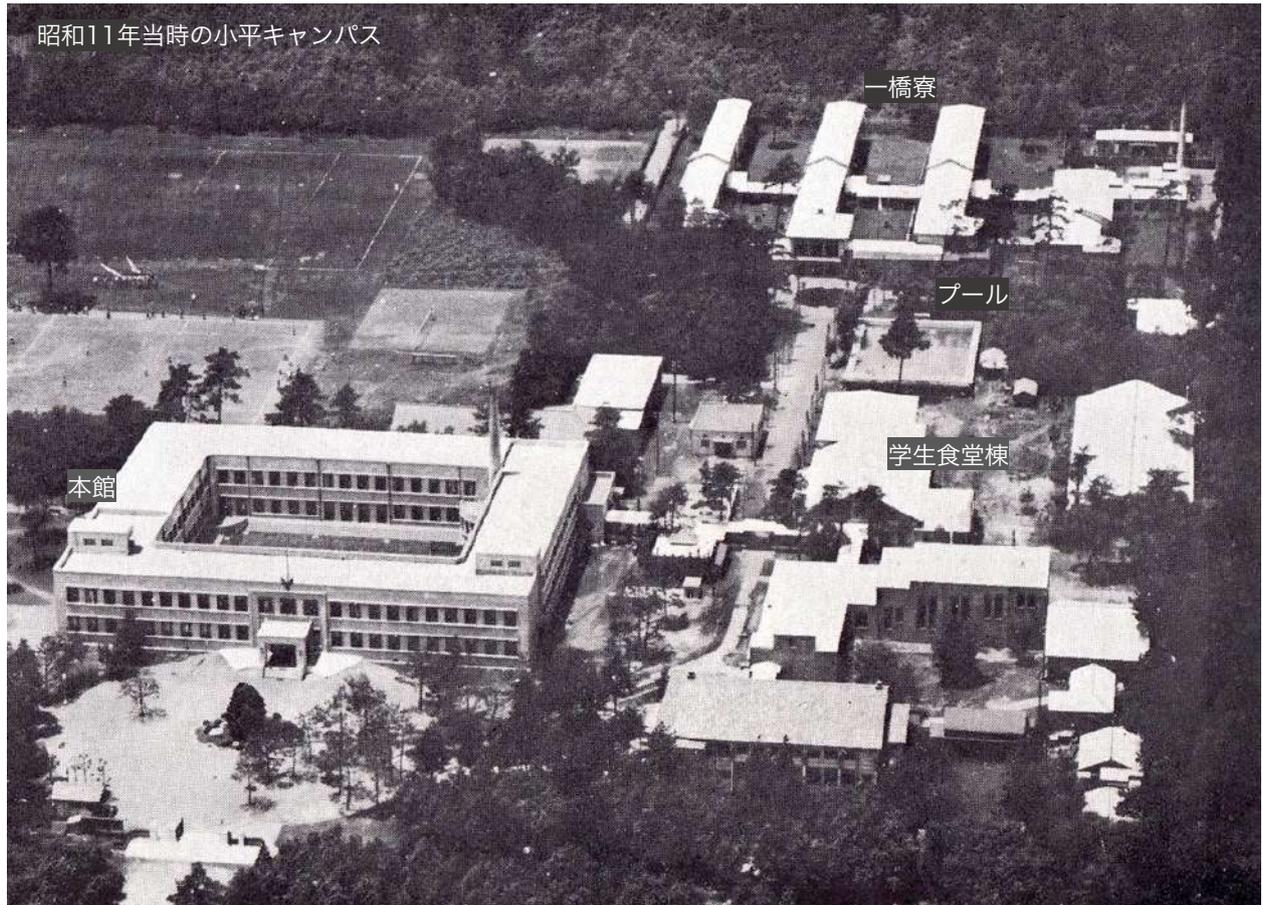


### 昭和28年 (1953)

戦前にあった部室は、軍が小平分校を接收した際に撤去されており、  
 部員たちは体育館の用具置き場で着替えていた。  
 しかし、この年、新設なった4棟の一橋寮がオープンし、それまで寮として利用されていた  
 学生食堂棟の西側半分が、各運動部の部室や合宿所として使えるようになった。  
 以後、春と夏の合宿を小平グラウンドで行うことがサッカー部の伝統となっていく。  
 当時は貸蒲団などなく、各自が自宅又は寮から布団や枕を電車に乗せて持ち込み、  
 食事は寮の賄いに依頼したという。

“わが国のサッカーは、東京オリンピックを一つの契機としてめざましい発展をとげ、  
 極めてポピュラーなスポーツになりましたが、当時は野球が国民的スポーツで、  
 サッカーはマイナースポーツの1つに過ぎず、そのため特に学生数の少ない我が校では、  
 高校サッカーでの経験者も少なく新人にはイロハから教えこむという状況でした。  
 3～4年で高度な技術を身につけることは並大抵なことではなく、自づと限界が  
 ありますので、技術で及ばない所は体力、気力で補うというのが我々のモットーでした。  
 このため日曜日も含め毎日が練習日で、ロングと称した多摩湖、国立への  
 往復ランニングは、ほんとに苦しいトレーニングでした。”

・ ・ 昭和34年卒業生 『60年史』より

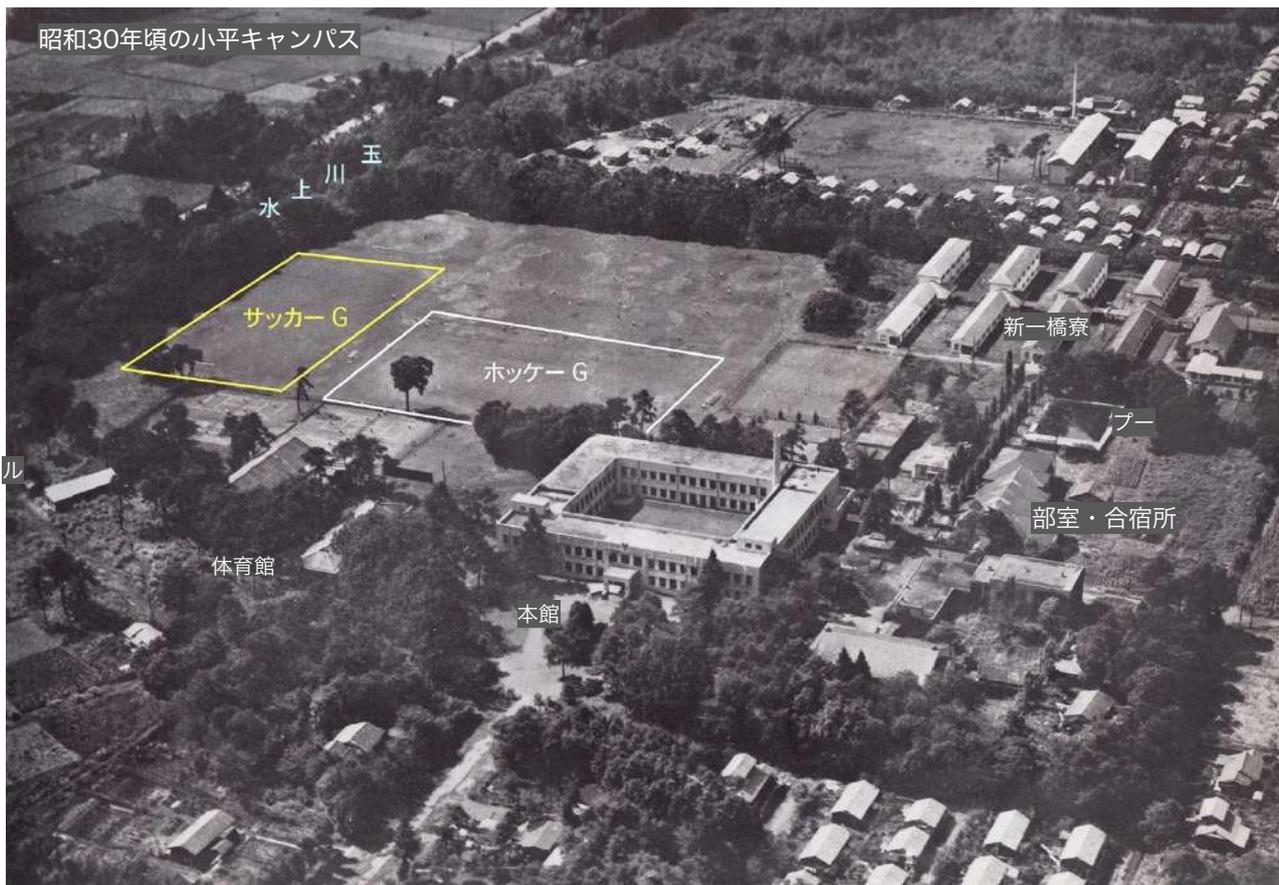


下の写真が旧学生食堂棟の西側半分で、1階は部室、2階は合宿所として長く使われていた。昭和56年（1981）に解体され、新たに鉄筋コンクリート造りの部室が現在の場所に建てられる。





新一橋寮



昭和30年頃の小平キャンパス

提供 朝日新聞社



体育館



小平合宿 昭和28年頃

### 昭和30年～昭和41年(1955～1966)

終戦から10年が過ぎ、朝鮮特需を経て高度成長期に入っていく日本。  
焼け跡から目覚ましい復興を遂げ、昭和31年度の経済白書には  
「もはや戦後ではない」というフレーズが踊る。

一橋大学サッカー部は、昭和25年以降ずっと関東リーグ2部にあり、  
何とか1部に上がろうと毎年奮闘するも、下位に低迷。  
そして昭和41年(1966)、ついに関東3部に降格してしまう。

この間も春夏の合宿は、ほとんど小平グラウンドで行われていた。  
技術で及ばない所は体力、気力で補う・・・その伝統も変わらない。



昭和39年(1964)、東京五輪で日本代表はベスト8。翌年には日本サッカーリーグが発足する。  
昭和43年(1968)、メキシコ五輪で日本が銅メダルを獲得するとブームに火が点き、  
小中学校からサッカーを始める少年たちが爆発的に増えていく。  
しかし彼らが我が校に入学するのは、まだ少し先のことであった。

昭和36年 小平夏合宿



昭和40年 小平夏合宿



昭和41年 小平夏合宿





### 関東大学サッカーリーグ I 期

昭和 21 年 (1946)	1 部	5 位：1 勝 4 敗	1 早稲田 2 東大 3 文理 4 慶応 5 東産大 6 立教
昭和 22 年 (1947)	1 部	最下位：0 勝 5 敗	1 早稲田 2 慶応 3 東大 4 文理 5 千葉医 6 商大
昭和 23 年 (1948)	2 部	最下位：0 勝 5 敗	1 立教 2 法政 3 中央 4 慈恵 5 日医 6 商大
昭和 24 年 (1949)	3 部	優勝：7 勝 0 敗	1 一橋 以下順位不詳：国学院 日大 東歯 東工 駒沢 虹陵 専修
昭和 25 年 (1950)	2 部	4 位：2 勝 3 敗	4 一橋 以下順位不詳：慈恵 千葉大 日医 農大 明治
昭和 26 年 (1951)	2 部	4 or 5 位：3 勝 1 分 2 敗	4 or 5 一橋 以下順位不詳：法政 日医 東工 慈恵 千葉大 農大
昭和 27 年 (1952)	2 部	4 位：2 勝 1 分 3 敗	1 青学 2 法政 3 東工 4 一橋 以下順位不詳：農大 千葉大 慈恵
昭和 28 年 (1953)	2 部	5 位：1 勝 5 敗	5 一橋 以下順位不詳：横浜市大 千葉大 法政 農大 東工 青学
昭和 29 年 (1954)	2 部	5 位：2 勝 4 敗	5 一橋 以下順位不詳：東工 法政 横浜市大 農大 学芸 青学
昭和 30 年 (1955)	2 部	6 位：1 勝 1 分 4 敗	6 一橋 以下順位不詳：農大 日大 法政 青学 横浜市大 学芸
昭和 31 年 (1956)	2 部	5 位：1 勝 2 分 4 敗	5 一橋 以下順位不詳：武蔵 法政 日大 日体大 学芸 青学 横浜市大
昭和 32 年 (1957)	2 部	5 位：2 勝 2 分 3 敗	1 日大 2 東大 3 上智 4 青学 5 一橋 6 日体大 7 学芸 8 武蔵
昭和 33 年 (1958)	2 部	4 位：3 勝 1 分 3 敗	1 日大 2 東大 3 防衛大 4 一橋 5 日体大 6 上智 7 武蔵 8 青学
昭和 34 年 (1959)	2 部	4 位：2 勝 2 分 3 敗	1 東大 2 日大 3 防衛大 4 一橋 5 日体大 6 成城 7 武蔵 8 上智
昭和 35 年 (1960)	2 部	6 位：1 勝 2 分 4 敗	1 成城 2 防衛大 3 日大 4 東大 5 日体大 6 一橋 7 武蔵 8 上智
昭和 36 年 (1961)	2 部	7 位：0 勝 3 分 4 敗	1 日大 2 東大 3 上智 4 成城 5 武蔵 6 防衛大 7 一橋 8 日体大
昭和 37 年 (1962)	2 部	3 位：3 勝 4 敗	1 東大 2 成城 3 一橋 & 上智 & 防衛大 6 農大 7 自由 8 武蔵
昭和 38 年 (1963)	2 部	6 位：2 勝 1 分 4 敗	1 日体大 2 上智 3 東大 4 成城 5 防衛大 6 一橋 7 自由 8 農大
昭和 39 年 (1964)	2 部	7 位：2 勝 5 敗	1 法政 2 順天堂 3 上智 4 成城 5 東大 6 防衛大 7 一橋 8 自由
昭和 40 年 (1965)	2 部	6 位：2 勝 1 分 4 敗	1 法政 2 上智 3 東大 4 農大 5 成城 6 一橋 7 順天堂 8 防衛大
昭和 41 年 (1966)	2 部	最下位：1 勝 1 分 5 敗	1 日体大 2 農大 3 成城 4 順天堂 5 上智 6 東大 7 青学 8 一橋
昭和 42 年 (1967)	3 部	3 位：3 勝 2 分 2 敗	3 一橋 以下順位不詳：関東学院 防衛大 学習院 自由 学芸 千葉大 成蹊

# 回想

## 石井 徹 昭30卒

我が一橋大学ア式蹴球部も、大正期の創部から遂に1世紀が経った。私の入学入部の時(昭26)から数えても既に70年が経っているが、もうそんなになるかの感が今更ながらある。当然西松会との繋がりも、その間、連綿と続いてきた。幾多の優れて積極的、指導的だった忘れがたい先輩方も多く物故され、今はそれらの先輩方と直接触れ合った交流を含め、西松会での思い出は深く懐かしく尽きない。



在学時を振り返ると、時々あった西松会との合同練習やOBチームとの紅白試合、合宿の合間にあったOBの指導・激励を交えた会合、恒例だった秋の明治節(11月3日)のOBとの紅白試合など、現役蹴球部と西松会が一体となった諸活動があった。年間スケジュールとしては、毎年秋に始まる関東大学リーグ戦での成果を最大の目標とし、部活動の整備と練習内容の集中に全力を注いだ。グラウンドでは瀬藤俊雄さん(昭18卒)の真面目で厳しい叱咤、松浦 巖さん(昭22卒)の能動的で具体的な技術指導、その他多数の往年の名プレイヤーであった諸先輩方の、真摯な指導と応援に随時接したものだ。これらは今も私の意識に印象的に鮮やかに残っている。

昭和27年春 小平グラウンドで行われたOB戦



最前列に大先輩が並ぶ(左から)

加藤省(昭23卒)・高柳(昭23卒)・吉沢(昭16卒)・二階堂晴(昭1卒)・吉田(昭16卒)・松浦(昭22卒)

時には先輩方に従って松本正雄大先輩の杉並の御宅に伺い、西松会の会合にも加えて頂いた。松本大先輩には現役蹴球部に対して随時大変行き届いた物心両面に亘るご指導、ご援助を頂いたものである。そのご教示は卒業まで続き、後に社会人としての精神的な自立にも大きく影響したものとなったことは私だけでなく多くの西松会員も自覚していることであろう。後年、最高裁に移られてからは世田谷の官邸に伺い、正月の西松会新年会にも末席に加えて頂いた年もあった。卒業後10年くらいは休日に小平グラウンドへ足を運び、現役学生諸君と共に球を蹴ったこともあったが、次第に身辺雑事に時間をとられ、時と共に小平行きも減っていったことを遺憾に思っている。

大戦前の昭和15年頃の東京商大は、関東大学リーグで持てる実力を十分に発揮し、優勝寸前まで迫った（昔、当時の慶応OBより直接聞く）黄金期であったという。この事は、西松会の先輩方の間でも後々の語り草であった。その後、未だ我が一橋は、この域に達し得ないでいる。この度、西松会有志のご尽力と諸活動により『100年史』の刊行に至ったことは誠に慶ばしく、会の結束と現役部員への後援にさらに注力されると共に、現役蹴球部も一層奮励努力を重ねてサッカーのレベルを上げ、『100年史』の続きをさらに光輝燦然たるものにするよう切望する。

一橋大学駅 昭和30年頃



サッカー部室 昭和28年



小平グラウンド 昭和42年



## 7. 東京都リーグ発足 ～ 関東2部復帰

昭和43年(1968)～昭和55年(1980)

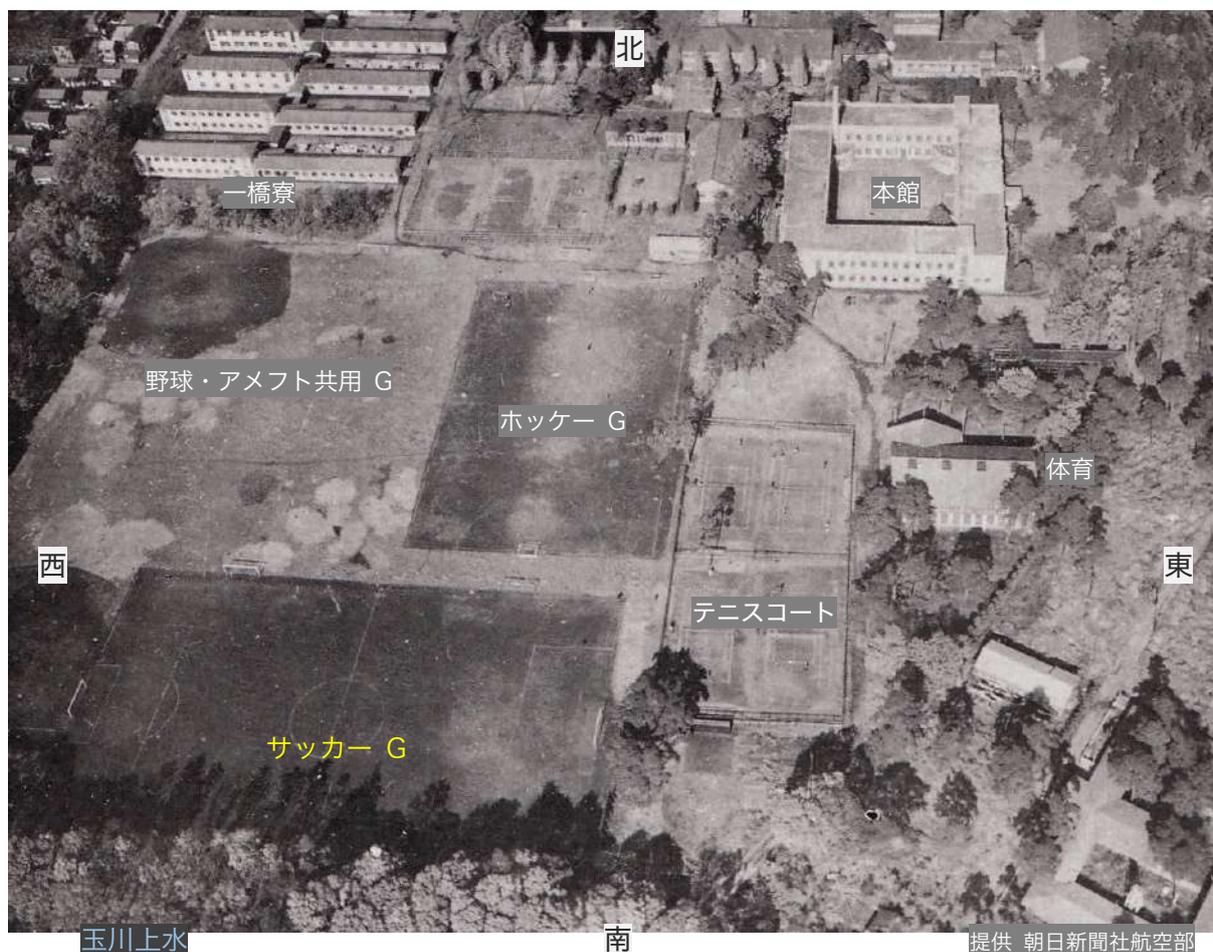
### 昭和43年(1968)

メキシコ五輪が行われたこの年、関東大学サッカーリーグの編成替えが行われた。  
1部と2部はそのままで、3部以下のチームは東京・千葉・埼玉・神奈川のリーグに所属し、この1都3県リーグ1部の1-2位=計8チームがトーナメントで争い、上位2チームが関東2部7-8位のチームと入替戦を行うことになった。

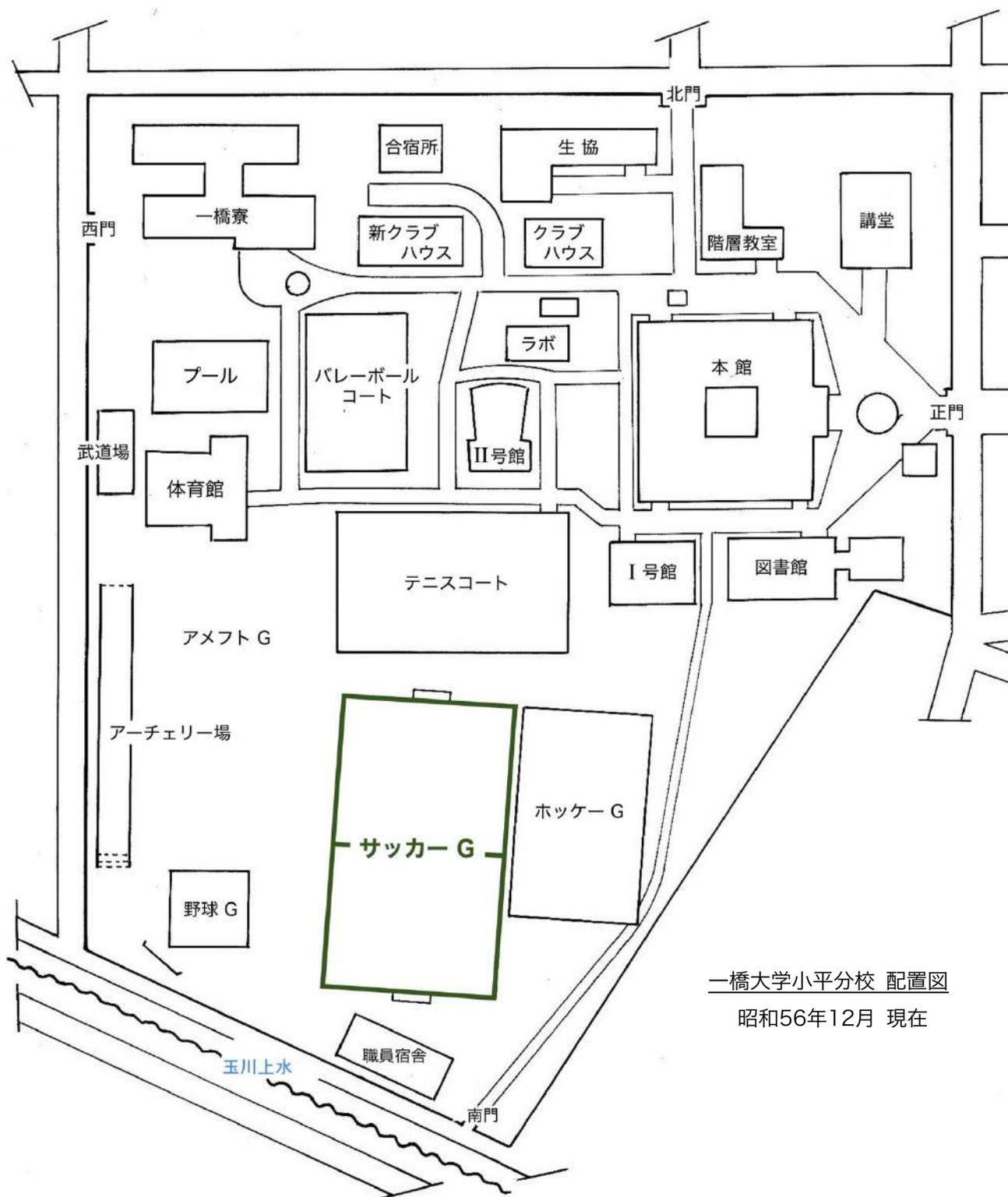
前年度「関東リーグ3部」だった一橋は、「東京都リーグ1部」からのスタートになる。  
結果は6勝1分2敗で2位となり、入替戦の切符を賭けたトーナメント戦に進出。  
しかし1回戦で順天堂大(千葉県リーグ代表)に惜敗し、関東2部への復帰は叶わなかった。

### 昭和45年(1970)

秋のリーグ戦終了後から翌春にかけ、小平グラウンドの改修工事が行われる。  
それまでのサッカーグラウンドは、玉川上水に平行してタッチラインが引かれ東西にゴールがあったが、南北に90度回転した現在の位置に移された。



その後10年ほどかけ、小平キャンパス全体の改修工事が進められる。ホッケー場やテニスコートが場所を移し、4棟あった一橋寮の南側2棟が撤去されて体育館・武道場・プールが造られた。また旧プールの跡地には、クラブハウス（部室）や合宿所が建てられていった。



一橋大学小平分校 配置図  
昭和56年12月 現在

今からちょうど50年前に生まれ変わった小平グラウンドは、台風や大雨の後には「小平湖」が出現するほど悪かった水はけも、かなり改善され、砂を入れて整備に励んだ部員たちの努力も実り、見違えるほど良いグラウンドになった。その後、国公立大会や東京都リーグの公式戦が小平で行われる機会が増えていく。



### 昭和46年 (1971)

東京都リーグの制度が改訂され、1部は10チームから8チームに減り、5位以下の4チームは東京2部との入替戦が義務づけられる。また上位4チームは関東大会に出場し、千葉・埼玉・神奈川・群馬のリーグ優勝校と計8チームで関東2部との入替戦出場を賭け、トーナメント方式で争うことになった。

さらに本年度は、我が部の歴史において画期的な事柄が2点あった。

1つは外部コーチとして、内野正雄氏（古河電工・メルボルン五輪日本代表）を招き、リーグ戦前には日本リーグの強豪である日立の胸を借りたこと。

もう1つは、サッカー部史上初めて、女子マネージャーが2名入部したことである。

猿渡啓子（津田塾大学）と、河野恵美子（武蔵野音楽大学）。

そのエピソードが何ともおかしい。

吉岡基夫（昭49卒）が西松会新聞11号に、こう綴っている。

“ラグビー部が津田塾大学に「女子マネージャー求む」と張り紙をしたところ、

サッカーとラグビーを間違えてグラウンドに来られた方でした。

「誰のお母さんだ」と言ってる人や、張り切ってヘディングシュートをしたところ脳天に当たってしまい、何を言ってるのか分からなくなった人もいました。”



## 昭和48年 (1973)

念願の「関東2部リーグ復帰」を成し遂げた年として、長く記憶されている。  
その要因を挙げると・・・

- ①試合メンバーのほぼ全員が中学からサッカーをやっていた経験者で、しかも2年次から（中には1年次から）レギュラーとして活躍しており、技術水準・試合経験が、これまでになく高いチームだった。
- ②古河電工の内野氏に続き、片山 洋氏（三菱重工・東京&メキシコ五輪代表）にコーチを依頼し、ヤンマー（現セレッソ大阪）、ヤマハ発動機（現ジュビロ磐田）など強豪チームの胸を借りることができたことも大きい。
- ③さらに部員たちの意識も高く、前年度から「スカウティング」を開始していた。一橋も本格的な近代サッカーの時代に入ったのだ。

“大きな模造紙に相手チームのメンバーの顔写真（自分のチームの試合を観ずに偵察に行き、望遠レンズで盗み撮りをしてくるのである）を貼り、それぞれの動きの特徴、行動範囲、攻守の型をたたき込むことが試合前日のミーティングのパターンとなった。”

・・・『60年史』より

それでも関東リーグ復帰への道のりは簡単ではなかった。

ギリギリの4位で関東大会に進出。1回戦・準決勝もPK戦にもつれ込む薄氷の勝利。  
決勝で関東2部7位の上智大に2-0で勝ち、ようやく復帰を果たしたのである。

【昭和48年度戦績】 東京1部：4位 4勝1分3敗

自由	立教	明学	青学	学習院	駒沢	成蹊	専修
○ 2-0	○ 2-1	△ 0-0	● 1-5	○ 2-1	● 1-6	● 2-3	○ 4-1
9/16 小平G	9/23 小平G	9/30 小平G	10/7 小平G	10/14 学習院	10/21 ?	10/28 小平G	11/5 小平G

★順位：1 明学 2 青学 3 立教 4 一橋 5 駒沢 6 専修 7 自由 8 成蹊 9 学習院

★関東大会1回戦 vs 群馬大 △ 1-1 / PK戦 4-2 勝 於明学  
準決勝 vs 明学大 △ 1-1 / PK戦 4-2 勝 於御殿下  
決勝 vs 青学大 ● 0-1 於駒沢競技場

★入替戦 vs 上智大（関東2部7位） ○ 2-0 於浦和駒場 → 関東2部昇格

## 昭和49年～昭和51年 (1974～1976)

関東2部での戦いに挑んだが、そのレベルはやはり高かった。

毎年下部との入替戦が続き、わずか3年で再び東京都リーグに降格してしまう。

以後、昭和52年から平成の時代、そして令和3年の現在に至るまで45年間、

関東リーグ復帰は達成されていない。



昭和50年度 (1975) リーグ戦  
vs 立教 ● 0 - 5 於御殿下

東京都大学サッカーリーグ I 期			
昭和 43 年 (1968)	1 部	2 位 : 6 勝 1 分 2 敗	1 自由 2 一橋 以下順位不詳 : 都立大 学習院 亜細亜 専修 成蹊 武蔵 東工 商船大
昭和 44 年 (1969)	1 部	5 位 : 4 勝 1 分 4 敗	1 拓大 2 成蹊 3 学習院 5 一橋 以下順位不詳 : 明治 亜細亜 専修 東工 都立大 自由
昭和 45 年 (1970)	1 部	5 位 : 3 勝 3 分 3 敗	1 亜細亜 5 一橋 以下順位不詳 : 専修 拓大 学芸 学習院 成蹊 明学 駒沢 自由
昭和 46 年 (1971)	1 部	4 位 : 3 勝 2 分 2 敗	1 駒沢 2 成蹊 3 青学 4 一橋 以下順位不詳 : 明学 亜細亜 自由 学習院
昭和 47 年 (1972)	1 部	7 位 : 2 勝 5 敗	1 明学 2 青学 3 駒沢 7 一橋 以下順位不詳 : 自由 学習院 亜細亜 成蹊
昭和 48 年 (1973)	1 部	4 位 : 4 勝 1 分 3 敗	1 明学 2 青学 3 立教 4 一橋 5 駒沢 6 専修 7 自由 8 成蹊 9 学習院
関東大学サッカーリーグ II 期			
昭和 49 年 (1974)	2 部	7 位 : 3 勝 4 敗	1 日大 2 順天堂 3 国士館 4 拓大 5 青学 6 東大 7 一橋 8 成城
昭和 50 年 (1975)	2 部	最下位 : 0 勝 2 分 5 敗	1 順天堂 2 国士館 3 青学 4 明治 5 拓大 6 東大 7 立教 8 一橋
昭和 51 年 (1976)	2 部	7 位 : 1 勝 1 分 5 敗	1 国士館 2 明治 3 青学 4 順天堂 5 東大 6 立教 7 一橋 8 拓大
東京都大学サッカーリーグ II 期			
昭和 52 年 (1977)	1 部	7 位 : 2 勝 5 敗	1 駒沢 2 立正 3 学芸 7 一橋 以下順位不詳 : 成蹊 亜細亜 国学院 明学
昭和 53 年 (1978)	2 部	優勝 : 6 勝 1 分 0 敗	1 一橋 2 帝京 3 学習院 以下順位不詳 : 成城 東工 大東大 東経 国学院
昭和 54 年 (1979)	1 部	6 位 : 2 勝 2 分 3 敗	1 青学 2 学芸 3 成蹊 4 立教 5 東大 6 一橋 7 自由 8 帝京
昭和 55 年 (1980)	1 部	5 位 : 0 勝 6 分 1 敗	1 明学 2 学芸 3 立教 4 東大 5 一橋 6 成蹊 7 学習院 8 自由

昭和51年度 (1976) リーグ戦  
vs 青学 ● 2 - 3 於御殿下



この章の最後に「外岡監督」について触れたい。

外岡諒三郎（昭23卒）は、OB諸氏が送ってくれた歴代リーグ戦の公式プログラムを見る限りだが昭和46年度から59年度までの14年間、監督として名が記載されている。『60年史』を見ても昭和35年度に橋本昭一（昭31卒）が監督就任とあるのみで、創部から昭和の時代を通じ、これほど長く監督をつとめたOBは他にいない。残念ながら平成28年に逝去され、監督になった経緯や思いをご本人に聞くことはできないが、追悼文集に寄せられた当時の部員たちの言葉から生前の外岡監督を偲ぶことができる。

“外岡さんは、よく練習を見に来てくれました。平日のこんな時間に練習を見に来て本当に良いのだろうかと思った時もありました。通常は有り得ないことですが、それだけにこうした時の練習は、いつもとは違った緊張感の中で、力のこもった練習ができたような気がします。我々学生に分け隔てなく寄り添い、学生の気持ちを慮りながら自然体で物事を処し、力を発揮させる最高の先輩でした。”  
 ・ ・ 松沼英昭（昭49卒）

“一橋大学ア式蹴球部の伝統とは、学生が自分たちで考えた戦略・戦術を実践し、結果については全ての責任を負うところにあったと思う。外岡さんの偉いところは、その学生の自主性とことん尊重してくださり、決して戦術論や技術論を学生に押し付けず、勝っても負けても教訓を学んで次に生かせ、と説いたことだった。それが最上級生にとってプレッシャーから解放され、目的に邁進する最高のモチベーションになったのだ。”  
 ・ ・ 山崎彰人（昭49卒）

“何といても関東2部への昇格試合に勝った後の、感極まった顔が忘れられません。まるで、自分の事のように喜んでいらっしやいまして、「ああ、勝って良かった」と心から思いました。じっと見守り、必要な時だけ、必要な事を短く言う外岡さんの姿勢は、リーダーとはかくあるべきという規範となるものだと思っております。”  
 ・ ・ 遠藤 環（昭50卒）

“まるで慈父の様に、穏やかなまなざしで、やさしく現役を見守っていただいたという感じでした。浅黒い顔に黒縁めがね、ポロシャツに濃茶のズボンの出で立ちが、40年余り経った今でも目にありありと浮かびます。何か特別なことがあったり、叱られたり、誉められたりした訳ではありませんが、今だに当時のお声とお姿をはっきり思い出します。”  
 ・ ・ 木内秀行（昭51卒）



外岡監督は、サッカーと一橋ア式蹴球部をこよなく愛し、誰よりも熱心にグラウンドへ足を運び、後輩たちと共に戦い、また酉松会初代会長の松本正雄がそうだったように、幅広い人脈を生かして就職活動も助け結婚の仲人も快く引き受けた。ふたまわり以上も年が違ふ当時の現役部員にとって外岡は、監督というより、一番身近な何でも話せる気さくな先輩で、“外岡さん、外岡さん”と呼んで慕った。父のような、年の離れた兄のような、そんな監督だった。



平成25年(2013)6月23日  
最後の試合観戦 於小平グラウンド

「試合は選手だけのものではなく、サブから先輩も含めた全員の闘いである」

この伝統の気風は、外岡監督の後も若手OBによって受け継がれ、平成9年度から監督に就任した赤星真一(平4卒)は、令和2年度まで実に24年間も続けた。100年の歴史は、こうしたOBの「無私」のサポートによって支えられてきたことも忘れてはいけない。

- \* 昭和46年度 ～ 昭和59年度 : 外岡諒三郎 (昭23卒)
- \* 昭和60年度 ～ 平成1年度 : 日置慶太 (昭56卒)
- \* 平成2年度 : 北山慶 (昭61卒)
- \* 平成3年度 ～ 平成5年度 : 福田正司 (昭61卒)
- \* 平成6年度 ～ 平成8年度 : 金谷斎 (平1卒)
- \* 平成9年度 ～ 令和2年度 : 赤星真一 (平4卒)



## 回想

### 佐藤博子 女子マネージャー 津田塾 昭54卒

昭和50年の大学生最初の夏休み、小平市鈴木町で行われていた旧石器時代の遺跡発掘のアルバイトでマリコ先輩と知り合いました。

・注）マリコこと今関真理子は津田塾生で昭和48年入部の女子マネ

遺跡の地層を掘り下げる度にスコップをふるい、

モッコで土を運ぶ体力を見込まれ、そろそろ夏休みも終わるある日、

“小平に来てみない？”と言われ、

“なにになに？”という好奇心のみで連れられて行くと、

部室の前には輪になって立つ、土にまみれた若者45人。

“え、え、何？ 思ってたのと違～う！ サッカーの試合が見られると思ったのにい”と、狼狽を隠して立つこと数秒、マリコ姐さんに、“1年生の女子マネ”と紹介されました。

“あれ？ 行ってみるだけじゃなかったっけ？”なんだか濃～い男子の塊に、

“まだ決めたわけじゃ・・・”とは言えず、そのまま女子マネ認知、みたいなの成り行き。

そこで即、“18日、御殿下で秋のリーグ初戦だから、来るように”とのお達しがありました。関東リーグ2部の開幕戦でした。

“場所わかる？ 御茶ノ水の聖橋口出てね、バスが・・・”と言われ、何しろ幼稚園と小学校は塀を隔てて東大、大きくなったら、みんなそこへ行くもんだと思って育った私は、

“御殿下なら知ってます”、当日迷うわけもなく、自信满满で家から歩いて行きました。

が、“そう言えば、45人もいたけど顔覚えてない！”と御殿下の北の角で茫然。

そう、ユニフォームの色も知らず、どのグループが我がチームか識別できず。

初日から迎えに来させる、エラそうな新人女子マネとなりました。

とは言え、リーグ戦も進み、慣れてきて、準備や片付けの手伝い、

試合でだけ許された水分準備、スコアブックの付け方を教わり、繕いものに、

ユニフォームに泥を滲みこませない魔法の洗濯、OBへの試合報告の印刷・宛名書き（手書き！）、

合宿のお供、東大の検見川グラウンドを借りるクジ引き（近所だから代理）、

そのうちウォームアップのランニング、たまに朝鮮大学までの往復マラソンに参加、

GKが1人の時は蹴り、小平のクラス対抗バレーボール大会に紛れこみ、

リーグ戦後にはソフトボール、と何やら楽しくやっておりました。

私は弱小女子大ワングル部員でもあり、練習はサッカーが火水金、ワングルが月木、

土日は試合または山へというサイクルで、サッカーの夏合宿から帰った翌日に

北アルプス白馬岳縦走に出発、というのもありました。



練習では、基本は球拾い。みんなのシュート力については、おかげさまで、結構走れました。枠を避けるシュートを打つ選手が多い日は、ゴール裏のテニスコートへ。

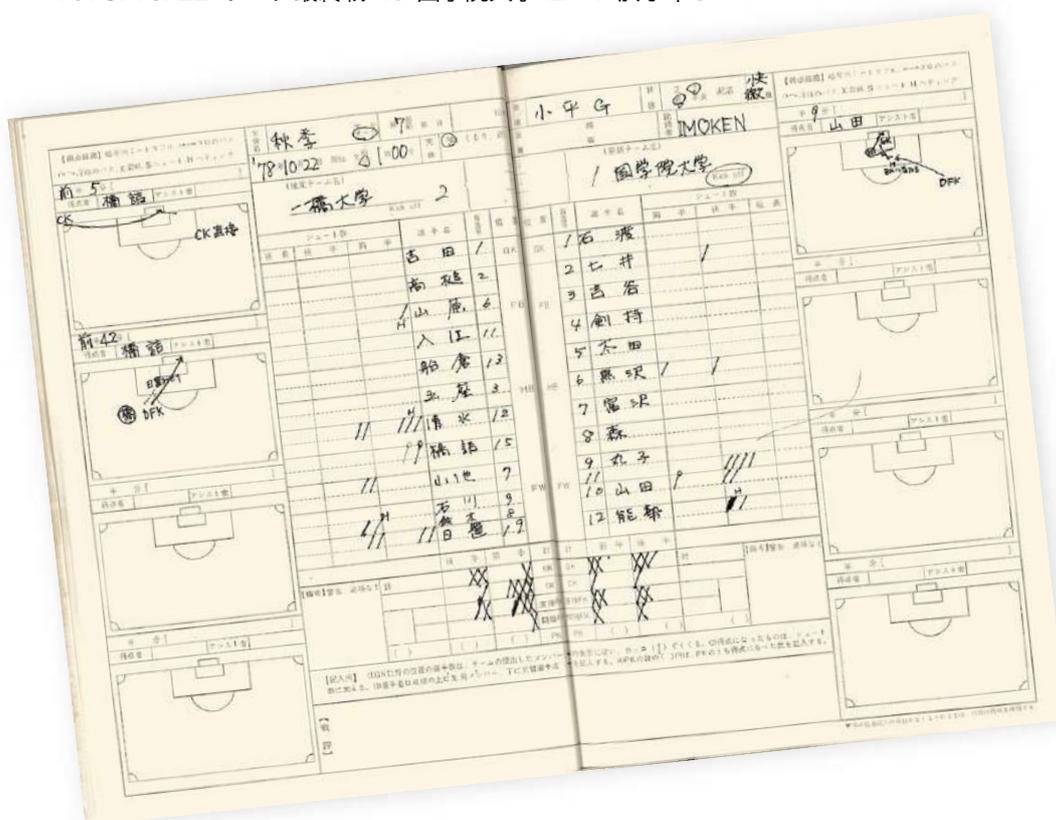
最初のうちは、“すみませーん！”と声をかければ、テニスの人たちも苦笑いで、蹴ったり投げたりで返してくれます。が、幾度も続けば、“いい加減にしろ！”という顔で、無言。そのうち投げ返してくれないことも増え、こちらはコソコソ、迷惑をかけないように、金網のフェンスの中に入ろうとすると、“スパイクで入らないで！”と、叱責が。私は、“テニスシューズで〜す！”と、にっこり中へ。

当時、サッカー部の女子マネの必需品は、テニスシューズでした。

そんな体力任せの楽しい日々が過ぎ、2年の秋には駒沢競技場で専修大学に2-4で敗れ、遂に関東大学リーグ2部から陥落、みんな泣いたのに、続く3年の秋には東京1部からも陥落。予期せぬ結果に肩を落としたその翌年、同期4年生は“上がるしかない”状態で7試合を戦い、昭和53年10月、小平で行われた東京2部の最終戦、国学院大学に2-1で勝利を収め、6勝1分で優勝し、東京1部への昇格を決めました。同期のみんなが泣きました。サッカーが楽しいとか、勝って嬉しいというよりは、翌年の後輩たちに1部で戦う場を残すことができ、責任を果たせた、肩の荷をおろせたという安堵の涙だったと思います。

### スコアブック

1978. 10. 22 リーグ最終戦 vs 国学院大学 2 - 1 於小平G



注) IMOKEN：昭和50年当時の4年生に同性の佐藤健太郎という先輩がいて、ケンタローの妹ということで「イモケン」と昔も今も呼ばれている。

「リーグ終了後に小平Gで撮った4年同期」 1978. 11. 11 撮影  
 (同期に GK 不在のため写真用に2年の大倉くんを拝借)



大倉・五味・加藤・高野・小池・五座・鈴木・石川・山原・大西・野村  
 (高槌・寺西は不在)

私は、1年生の9月、遺跡発掘の帰り、成り行きで女子マネになりましたが、  
 今でも、あの重い小平の土の感触を足の裏に思い出します。  
 美しく機能的な人工芝になっても、土のグラウンドを走って蹴って、  
 勝ったり負けたり、上手くなったり怪我したり、泣いたり笑ったり、  
 半世紀近く前に土のグラウンドを駆け回った春夏秋冬、若き日のみんなの思いが残る、  
 小平グラウンドの情景を忘れません。

サッカー部100周年、おめでとうございます。  
 そのうちの3.5年、共に過ごせたことに感謝して。

「ニヒリストの木」 1978. 11. 11 撮影  
 ホッケーGの北側、1号館の近くに  
 1本独立して立っていた背の高い木で、  
 私は密かにそう呼んでいた。  
 皆の写真撮った日、この木もずっと  
 グラウンドを見てたね、って思って撮った。  
 今も立っているだろうか・・・



## 百年史秘話 ③ 《ユニホーム》



大正13 - 14年 (1924 - 1925) 頃

襟付きの白シャツに  
おそらく紅のマーキュリーを刺繍。  
ストッキングの色は不明だが、  
これもスクールカラーの紅か。



昭和3年 (1928)

左半身が白で、右半身がグレー。  
襟は、その逆。  
左胸に紅のマーキュリーを刺繍。



昭和4年 (1929)

紅のシャツに白襟で  
左胸に白の「一橋」を刺繍。



昭和30年 (1955)

戦後も主流の紅シャツに白襟が続くが、飾り紐付きで珍しい。  
白パンツと紅ストッキングも定番に。



昭和40年 (1965)

相手チームによっては、  
白・白・白 で、胸に紅のマーキュリー。  
これも定番になっていく。



昭和48年 (1973)

関東2部復帰がなかなか実現しない中、  
チームのムードを変えようと黄・青・黄に。  
古いOBには不評だったが、見事復帰を果たし  
批判の声は聞こえなくなったという。  
この黄・青・黄のユニホームは  
昭和55年まで続く。

昭和51年 (1976)

関東リーグ2部の試合  
於東大御殿下



昭和50年代後半、イングランド代表やトヨタカップで優勝したブラジルのグレミオを真似たユニホームに変わったが、昭和63年からACミラン風のユニホームが定着し、平成14年頃まで続く。その後は若干の違いはあるものの、正ユニが 紅・紅・紅、サブユニが 白・白・白の2パターンで現在に至る。

昭和57年 (1982) 紅・紅・紅



昭和58年 (1983) イングランド風



昭和59年 (1984) グレミオ風



平成10年 (1998) ACミラン風



平成17年 (2005)



令和2年 (2020)



## 百年史秘話 ④ 《シュート板》

写真に残る最も古いシュート板は、昭和29年（1954）に造られたもの。  
 焼跡からの部の再建に多大な貢献をした松浦 巖（昭22卒）が、  
 学生の要望に応じてOBに特別寄付を募り、設置してくれた。  
 10年あまり使われた後、ボロボロになってしまい、昭和40年から41年の間に修復される。

昭和30年（1955）



昭和40年（1965）



昭和41年（1966）

その後、昭和45年から46年にかけて、サッカーグラウンドが90度回転された際に  
 シュート板も新調され、場所も玉川上水側に移動した。  
 しかし、いつしか使われなくなって無残な姿を長い間さらしていたが、  
 創部100周年となる令和3年、小平グラウンドの人工芝化と共に再び新調された。

旧小平G → 新小平G



## 百年史秘話 ⑤ 《西武多摩湖線》

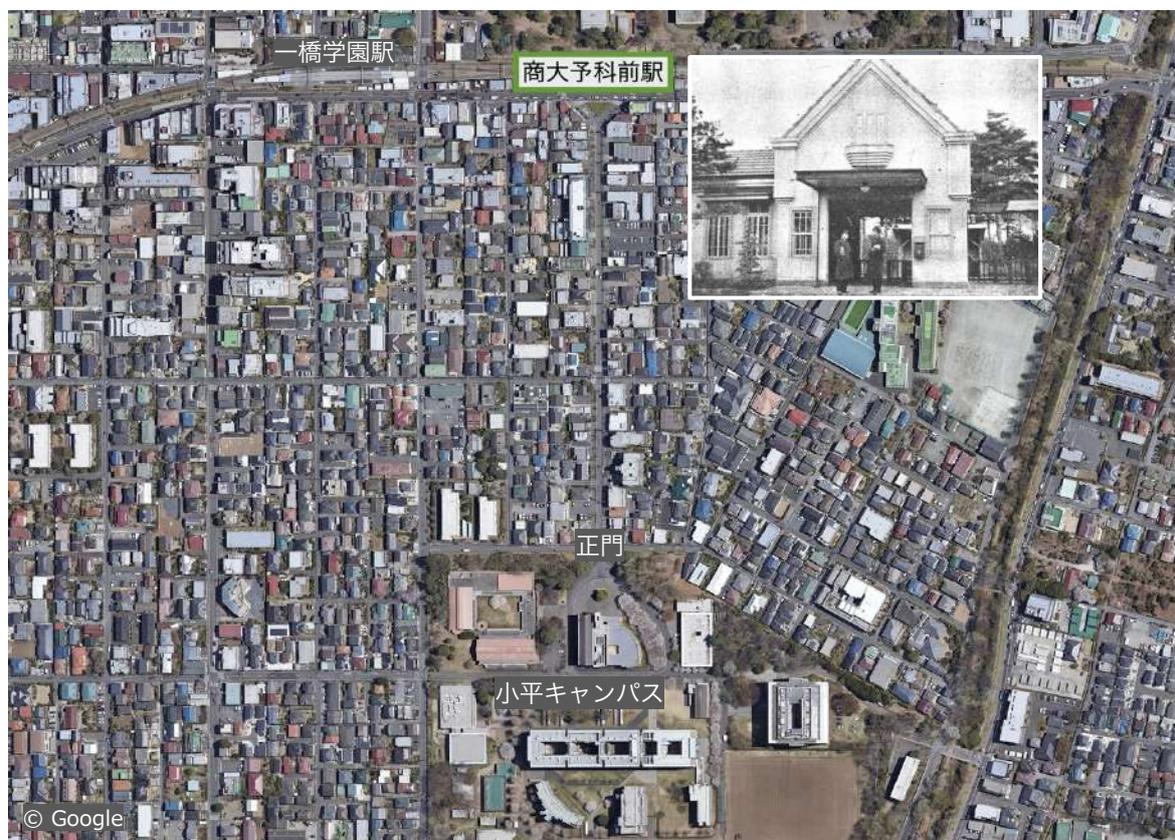
昭和3年(1928)4月6日

国分寺＝桜堤＝小平学園＝青梅街道＝萩山の4.4キロが開業。

昭和8年(1933)9月11日

石神井にあった商大予科の小平移転に合わせて「商大予科前駅」が開業。

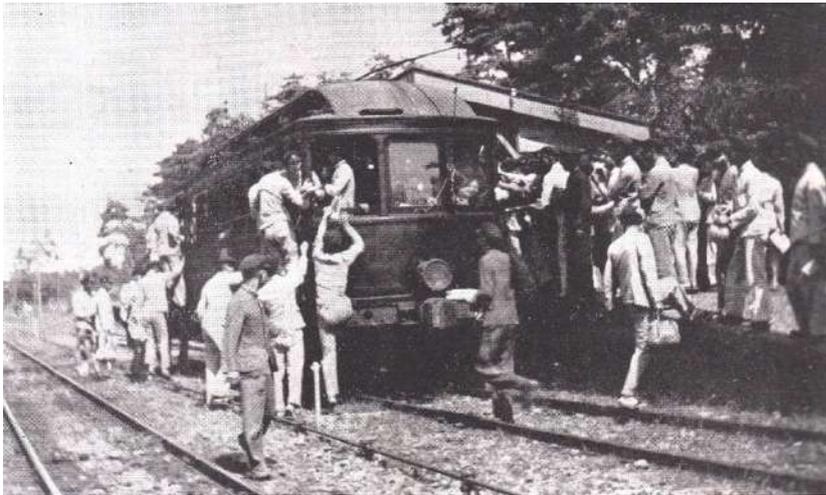
この駅は小平キャンパス正門前の通りをまっすぐ歩いた突き当たりにあった。



### 商大予科前駅跡

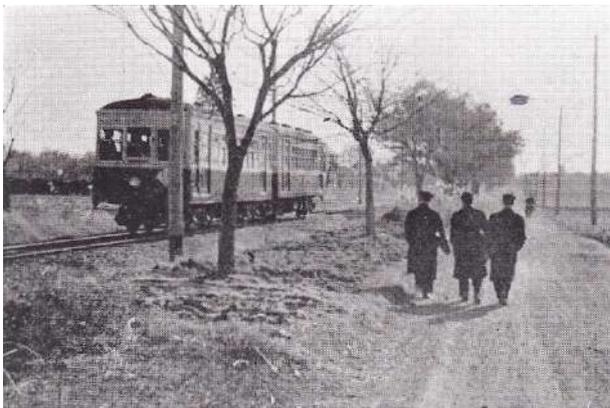
上下線の列車がすれ違うための  
レールが残っている。

当初は1両編成で30分に1本ぐらいしか走っていなかったのに、  
登校・下校はスシ詰め状態。発車時刻に多少遅れても、  
大声で叫べば運転士が待ってくれるのどかな時代だった。  
屋根の上に乗る者もいて走行中に落ちたりしたが、  
ノロノロ電車なのでケガはなかったという。

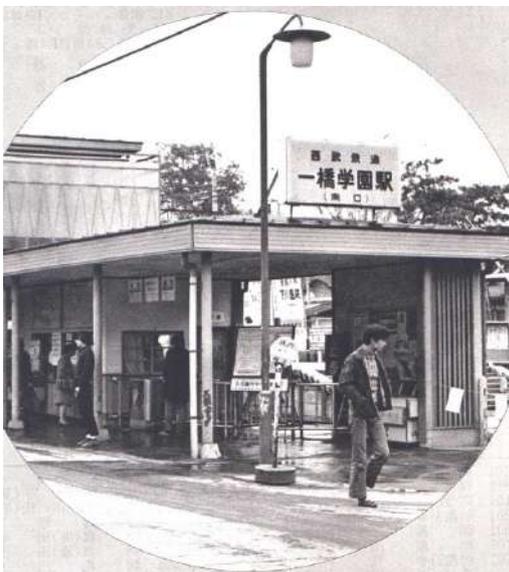
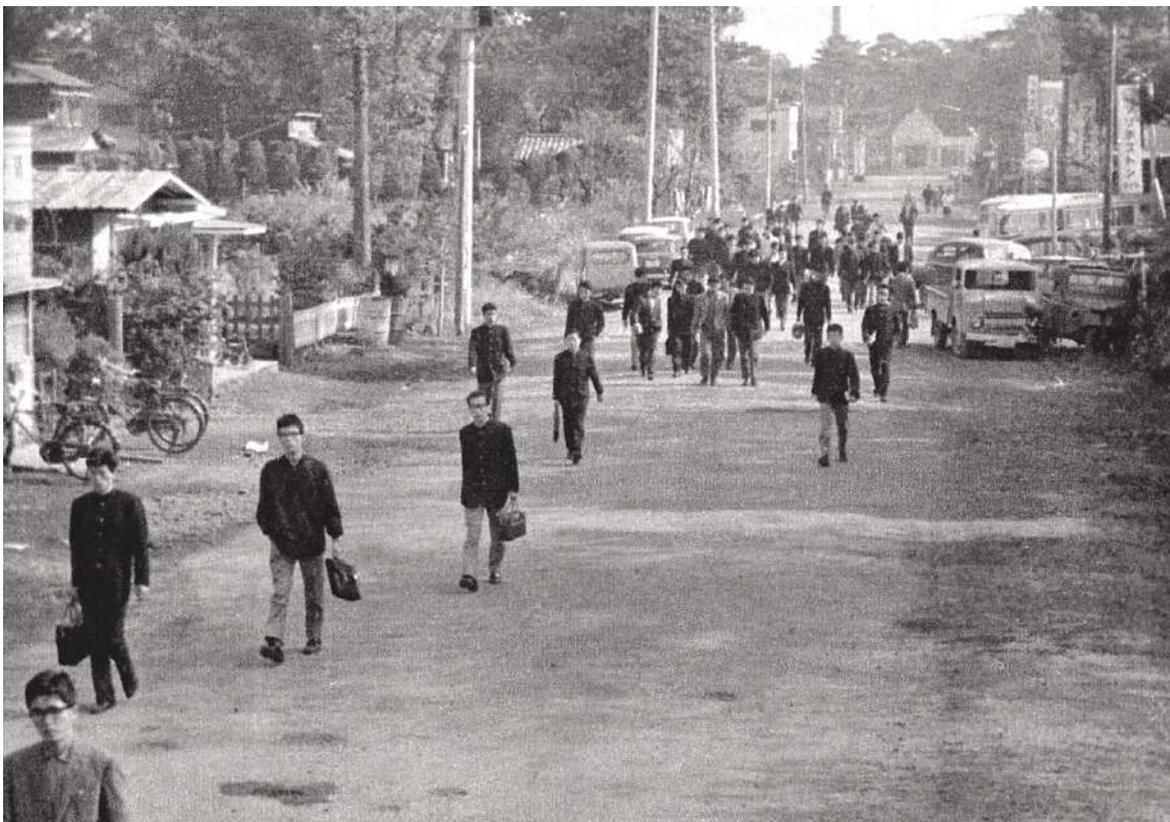


昭和24年(1949)5月1日

東京商科大学が一橋大学に改称されたのに合わせ、商大予科前駅も「一橋大学駅」に変わる。



登校風景：一橋大学駅から小平分校正門へ・・・昭和39年卒業アルバムより



昭和41年（1966）7月1日

一橋大学駅と小平学園駅が併合し、  
2駅の間地点に「一橋学園駅」が新設され、  
現在に至る。



一橋学園駅前商店街（昭和50年代後半）



## 8. 昭和から平成・令和へ ～ 変革と試練

昭和56年(1981)～令和2年(2020)

### 昭和56年(1981)

東京1部に降格した昭和51年度シーズン以来、なかなか関東リーグ復帰を果たせない中、本年度からドイツでライセンスを取得したプロコーチ、品村敏明氏(三菱養和クラブ)を招聘。クーパー走(12分間走行テスト)を含む様々な練習方法とディフェンスからボールをつなぐ戦術などの指導を受けるが、なかなか結果に結びつかず、東京2部に降格してしまう。その後、再び1部に復帰するまでには35年もの月日を要した。

### 昭和62年(1987)

我が部に初めて女子マネージャーが登場したのは、先述したように昭和46年(1971)。以来、津田塾大や実践女子短大など外部の女子大生が続いていたが、この年、初めて一橋大生の女子マネージャーが2名入部した。一橋の女子学生といえば、1970年は61名(全学生の2%足らず)だったが、80年:217名、90年:561名と急激に増えていった時代で、自然な成り行きではあった。そして平成16年(2004)には、13名の女子マネージャー全員が(その数にも驚く)一橋生となる。

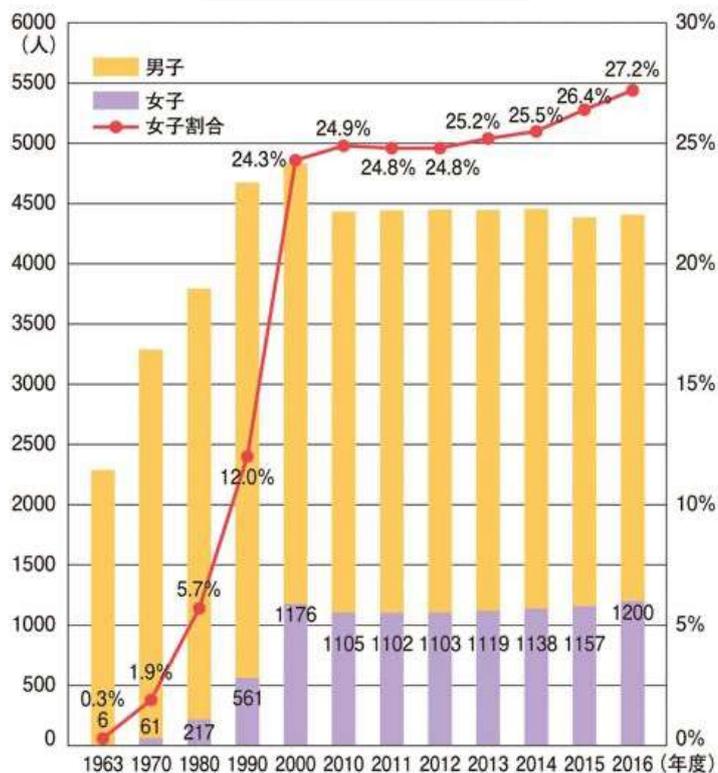
初の一橋大生女子マネ 松本園子



平成16年度 女子マネ(4年)



一橋大学 女子学生数の推移



\*一橋大学HQウェブマガジンより抜粋\*

## 平成8年 (1996)

1月8日、創立メンバーの1人であり、長く西松会の会長を務め、一橋ア式蹴球部の精神的支柱でもあった松本正雄が逝去。享年94。

奇しくもこの年、小平分校が廃止され、サッカー部員の勉学と生活の中心は国立になる。体育の授業も小平で行われなくなったため、グラウンドは次第に荒れるがままになり、大雨が降れば「湖」、乾けば「砂漠」の状態になっていく。そして一橋大学ア式蹴球部は、平成に入っても東京都リーグの2部と3部を行ったり来たりする、長い低迷の時代にあった。



## 平成14年 (2002)

日本で初めてワールドカップが開催され、日本代表も初の決勝トーナメント進出を果たし、サッカーを愛するものにとっては忘れがたいこの年に、我が部は東京都リーグ4部に降格してしまった。翌年すぐに3部に復帰したものの、低迷の時代を抜け出す力は依然として無かった。

## 平成20年 (2008)

当時の西松会会長・土井徳秋(昭45卒)の発案で、OBと現役部員の寄稿による「西松会新聞」が創刊される。これが現役とOB、さらには幅広い年代層を抱える西松会の会員相互の交流の場となり、コミュニケーションの輪を広げるツールとして今に続いている。

注) 平成26年(2014)から「西松会新聞」はデジタル化され、ウェブサイト上で公開されている。

<http://www.yushokaishimbun.com/>



## 平成25年 (2013)

我が部の歴史において重要な転換点であり、「変革」の年となる。前年度GM平林幸治(平25卒)の提案により、部の運営や練習方法が劇的に変わったのである。まずプロのフィジカルコーチやメンタルトレーナーを招聘し、最新のトレーニングを開始した。さらに、これまで4年生の主将とGMだけに頼ってきた部の運営を、平林が独自に考案した部員全員が参加する「ユニット制」に変えた。これがサッカー部の新しい伝統となっていく。西松会新聞の第12号に寄稿した平林は「ユニット制」について、こう綴っている。

“大学の部活はどうしても4年間という制約があります。4年生が中心になってチーム作りをし1年単位で見ると非常に良い戦略や戦術を考案しているのですが、その1年が終わると、またゼロベースで考え始めてしまい一貫性や積み上げができないと感じていました。そこで、チームの戦略や戦術の意思決定の際に3年生や2年生のGM候補と共に考えるというプロセスにこだわりました。その後輩がGMになったときには、私の試行錯誤のプロセスは全てスキップでき、チーム力は相当なスピードで上積みされていくでしょう。そして各ユニットにも4年生だけでなく3年生や2年生にも入ってもらい、若い年次から部の運営に携わることで、それぞれの領域での知識を次の世代に蓄積しやすい仕組みにしました。また一人ひとりに明確な役割があれば、部の運営に関わる当事者意識が生まれやすくなり、サッカー部という組織の力を最大限に発揮することができると考えました。一番根本にあったのは、一人ひとりの部員がサッカー部で活動することに対して、多くの「意味」を感じてもらいたいという想いでした。卒業するとき、「一橋大学サッカー部に入って良かった」と心から思える経験をしてほしかったのです。”



平林幸治

### 《サッカー領域 ユニット》

技術	チーム戦術や練習メニューの考案、ゲームの分析(スカウティング)を行う。
フィジカル	身体づくり・怪我リハビリ・食事の専門的知識を身につけ、選手にフィードバックする。
メンタル	メンタルの強化トレーニングによって、試合でのパフォーマンス向上をねらう。

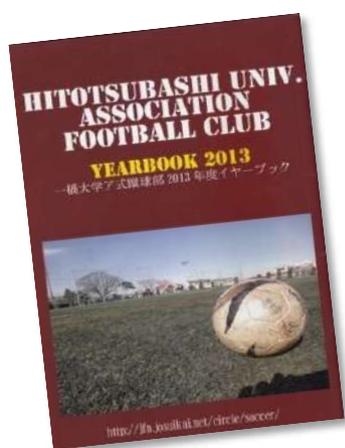
### 《非サッカー領域 ユニット》

広報	各種SNSからの情報発信、告知・試合ハイライト動画の作成など、広報活動全般を行う。
庶務	スケジュール管理、試合のマッチメイク、グラウンドの確保、会計など様々な事務を担当する。
OB	OB戦やOB総会、寄付周りなどの企画運営を通じ、OB・OGと現役の交流を促進する。
イベント・応援	合宿や遠征の運営を行い、集中応援日やレクリエーション企画を通じて部の一体感を向上させる。
用具・施設	小平グラウンドの維持管理、部の用具備品の補充と管理を担当する。
イヤーブック	OB・保護者への活動報告や新歓パンフレットとして使用するイヤーブックを作成する。
新歓	スポーツ推薦枠が無い中で多くの新歓力を獲得するために、新歓イベントの企画と運営をする。
マネージャー	タイムキーパー、スコア管理、ビデオ撮影、選手の食事管理など様々な仕事で選手をサポートする。

まさみつ  
並木磨去光：フィジカルコーチ



大義見浩介：メンタルトレーナー



「小平通信」と「イヤーズブック」も、平林の代から始まった。チーム強化に必要なOB・OGとの強固な協力体制を築くため、公式戦時に選手紹介シートを配布すると共に「小平通信」で試合結果と寸評を発信した。さらに現役の1年間の活動報告として作成された「イヤーズブック」は新入生の勧誘にも大いに役立ち、これが現在のユニット活動にも引き継がれている。

平成25年度は、東京都大学リーグ戦が秋季1回だけでなく、春秋2回の戦績で争われるようになった年でもある。Home & Away 方式が採用され、人工芝グラウンドを持つ大学が増えたため、次第に小平グラウンドでの試合は敬遠されていく。本年度は18試合中8試合、翌年は4試合、平成27年度にはついにゼロになってしまった。

部員たちは人工芝に慣れる必要があり、府中市郷土の森公園の人工芝グラウンドなどを借りて練習を始める。使用料は1,600円 / 1時間。午前中の方が借りやすいので、練習時間も朝が多くなる。この頃から西松会幹事会で「小平グラウンド人工芝化」に向け、本格的な検討が始まる。



府中市 郷土の森サッカー場



## 平成28年 (2016)

「ユニット制」という大胆な改革から4年目、その成果が結実する。

10月23日のリーグ最終戦、武蔵大に3：1で勝利し、36年ぶりの東京都リーグ1部昇格を決めたのである。試合が行われた首都大学のグラウンドには、これまでになく大勢のOB・OGや父兄が集まり、選手と共に悲願達成を喜び合った。

【戦績】 東京2部：2位：11勝3分4敗 → 東京1部 昇格

	成蹊	武蔵	上智	玉川大	学習院	成城	日大生資	理科大	山梨大
春	● 0-2	△ 3-3	○ 4-0	○ 2-0	○ 4-1	● 2-3	○ 3-0	○ 2-0	○ 6-0
秋	● 2-3	○ 3-1	△ 2-2	△ 1-1	○ 3-1	○ 3-0	● 0-1	○ 4-2	○ 5-0

平成28年10月23日 vs 武蔵大 ○ 3-1 於首都大学グラウンド



しかし翌年、我が部は、  
100年の歴史の中でも前例がない事態に直面する。

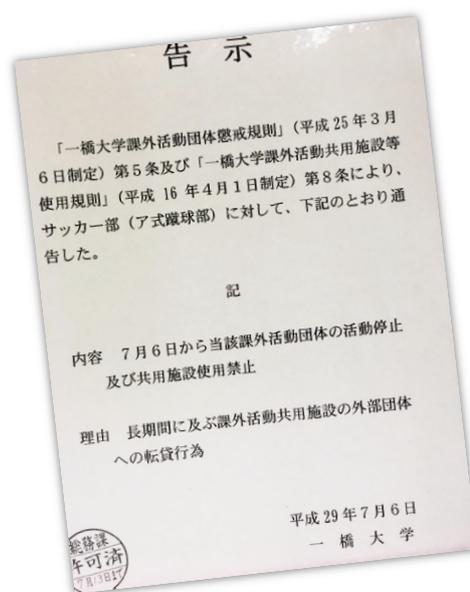
## 平成29年 (2017)

36年ぶりに挑んだ東京都1部のリーグ戦。

5月から6月にかけて行われた春期リーグは、  
3勝3敗3分、18得点、16失点、勝点12で、6位。  
十分やれるという手応えを得た矢先のことだった。

7月6日、大学側から「無期限の活動停止処分」が  
突然告示される。理由は、前年の6月から本年3月まで  
小平グラウンドを外部の少年サッカークラブに貸し出して  
いたこと。無償の行為ではあったが、大学の許可を得ずに  
行った「無断転貸」が問題視されたのだ。

西松会幹事や現役部員による真摯な嘆願と反省活動で  
活動停止処分は2ヶ月で解除されたが、秋季リーグ戦の  
参加は叶わず、戦うことなくして2部に降格してしまった。



\*詳細は西松会新聞Websiteの記事参照  
<http://www.yushokaishimbun.com/?p=1620>

【戦績】 東京1部：9位：3勝3分12敗 → **東京2部 降格** × 不戦敗 0-3

	明学	立教	大東大	東経	山梨学院	成蹊大	国学院	武蔵	帝京
春	△ 1-1	● 0-2	△ 2-2	● 0-1	○ 1-0	△ 3-3	○ 5-3	● 2-4	○ 4-0
秋	× 0-3	× 0-3	× 0-3	× 0-3	× 0-3	× 0-3	× 0-3	× 0-3	× 0-3

まさに天国から地獄・・・

当時の部員たち、とりわけ4年生は、歴代OBの誰もが経験したことがない苦痛を味わった。  
しかしこの試練は、彼らが新しい活動に目を向けるきっかけとなる。「地域貢献活動」である。

活動停止期間中、部員たちは反省を行動で表すため、国立キャンパス周辺の清掃活動、  
地域の高齢者や障害者の支援、日本語を母国語としない中高生の学習指導など、  
様々なボランティア活動を行った。これが次世代にも受け継がれていく。





国立市内の清掃



小平社会福祉バザー

### 令和元年（2019）

8月4日、小平市内の小学生約20名を招き、アメフト部と協働で、第1回「スピードトレーニング教室」を小平グラウンドで開催した。終了後は多くの父兄から感謝のメールが届き（次ページに掲載）、参加した部員は、想像以上のやりがいと地域貢献の意義を改めて感じた。100年という長い歴史の終わりに、我が部は変革と試練の刻を経て、大きな可能性を秘めた新しい時代に入ったのだ。



“明日は、いよいよ運動会です。

リレーの選手になったのでトレーニングの成果が出てくれると嬉しいです。  
ご指導頂き、ありがとうございました。”

“この度は、お世話になりました。

迎えに行った際に、娘は「やった!! すっごく早く走れたんだよ!! 」と、  
興奮ぎみに報告してくれました。皆さまのご指導が素晴らしく、  
指導を受ける本人に「ずっと」入ってきたのかなと思いました。”

“昨日はスピードトレーニングありがとうございました。

大学生の楽しいお兄さんたちと、動画を見ながら分析したり、褒めてもらったり、  
遊んでもらったりしながら楽しく学べたようです。すぐに結果は出ませんでした、  
私も教えるコツみたいなものを学べたので、運動会前は家で極秘特訓したいと思います。

“子どもたちは持ち帰ったパンフレットを毎日の様に見て、これはアニキだ! とか、  
この人いたねとか言って楽しんでいます。次回も是非参加したいです。”



## 令和2年(2020)

創部100年目となる年に、世界をパンデミックが襲う。

前年12月に中国の武漢で発見された新型コロナウイルスが、あっという間に世界に広がり、日本でも4月7日に緊急事態宣言が発令され、それに伴って一橋大学は入学式を中止。授業もゴールデンウィーク明けから原則リモートで行われるという異常な事態となった。

サッカー部においては、すでに3月4日から課外活動と学内施設の使用が事実上禁止となり、アミノバイタルカップや春季リーグ戦など公式戦も中止。ボールを使った全体練習さえできず、Zoomでの体幹トレーニングや近所の公園で走るなど、自主トレーニングを余儀なくされた。3年前の「活動停止処分」をようやく乗り越えた部員たちに、再び試練が課せられたのである。

「活動自粛」が解けたのは、5ヵ月後の8月初旬。

9月5日から始まる秋季リーグ戦の、わずか1ヵ月前のことだった。リーグ戦も日程が縮小され、これまでとは違うルールでの開催となる。すなわち10チームが総当たりでHome & Away 18試合を行うのではなく、1巡目の9試合が終了した時点で、上位と下位5チームずつに分かれて4試合を行い、計13試合で順位を決めることになったのだ。

また上部リーグとの入替戦は行うが、下部リーグとの入替戦は中止となり降格はなくなった。

本年度は、部の運営にも大きな変化があった。

元サッカー日本代表で解説者としても活躍している戸田和幸氏をコーチとして招聘したのである。



戸田和幸コーチ

戸田氏は、一橋が長く慣れ親しんできたサッカーからの脱却、つまり身体面とメンタルに重きを置き特定の個人に依存せざるを得ない「属人的」なサッカーから「戦術的」にプレーするサッカーへの移行・脱却を提唱し2つの大きな改革を行った。1つ目はチームをAB2つに分け、Aチームは戦術的な練習に最適な24名(FP22名・GK2名)で東京1部昇格を目指すベースのプランニングを行い、残りはBチームで個々のレベルの改善・成長を促しAチームへと繋げていく。2つ目は、週5日の活動を6日にした。これまでは木曜が休みだったが、リーグ戦の開催日が日曜なので、最も試合に近い負荷と内容で準備ができる木曜を休みにするのはチームのマイナスにしかならないからである。

【戦績】 東京都リーグ2部：6位 5勝6敗2分

◎不戦勝

	亜細亜	東大	上智	玉川大	武蔵	成城	理科大	都立大	東工
秋	● 0-1	○ 3-1	● 0-1	● 0-1	● 1-2	△ 1-1	● 0-1	◎ 3-0	○ 2-0
	-	-	-	-	-	△ 0-0	● 1-2	○ 2-1	○ 6-0

リーグ戦の結果こそ6位と振るわなかったが、これまでリーグ戦の出場経験が全くなかった何人かの選手が大きな成長を遂げ、チームの主力となる活躍を見せた。また高度な守備戦術を用いながらのカウンターで今季1部に昇格した東大に勝利するなど、勝つために必要なプレーを行う「戦略的戦術的なサッカー」が、徐々にではあるが実を結びつつある。戸田氏は、令和3年度シーズンから「監督」としてチームを率いる。



下の写真は令和2年（2020）2月15日の三商大戦で、一橋は3年連続で優勝を果たす。その20日後、コロナ禍により小平グラウンドでの練習・試合は禁止となり、この三商大戦が「土のグラウンド」での最後の試合となった。昭和9年（1934）以来、86年間、我が部と共に歩んできた小平グラウンドの、ひとつの歴史が幕を閉じたのである。



## 回想

### 金谷 斎 西松会代表幹事 平1卒



それは全く想定外の出来事でした。不意な緒方会長からの電話。

“一身上の都合で辞意を固めた倉崎くんの代わりに、  
代表幹事をやってくれないか？” えっ、俺？

果たして、それから何年経ったのか？ いつからだったかすら  
今やさっぱり思い出せず。大体それまでは毎年の総会にだっ  
てごく偶にしか顔を出さない、名前だけ副代表幹事だったのに……。

ただ臍げな課題みたいなものは感じていました。

所狭しとひしめく現役たちの中に、大先輩方がごく僅かポツンと佇む OB 総会。

数年に亘り前進のきっかけをつかめない小平人工芝化。

そして、待ったなしに迫りつつある 100 周年。

とんでもない時に引き受けちゃったかな？ 当時の心の中の声。笑

まあでも出来ねえもんは出来ねえし、やれることからやるかあ。こちらは独り言。

まずは手始めにと思ってやり始めたのは、OB 総会。

せめて現役より OB が多いという姿を密かな個人的目標に。と思いきや、  
自分たちの頃に比べて、やけに大人数の現役。笑

まあそれでも集まった OB の皆さんが、結構集まったじゃんと思えるくらいには  
何とかかなりましたかね？ それすら数年かかっちゃいましたけど。

そのためにやったことも特に画期的なことはなく。

ひとまずサラリーマンが忙しそうにしている 3 月から時期を変え新年会に。

OB 戦と同時開催にして若手の人数を嵩上げ。笑 そしてあとは地道な声掛け。

近い年代の後輩には年末の忘年会で、ここぞとばかり昔さながらのパワハラ。

てめえら分かってんだらうなって。笑

ただ、人生は分からないもの。

その新年の盃酌み交わしの中で、長年停滞していた懸案への思いがけぬ胎動が。

その懸案。小平人工芝プロジェクト。でも最初は目に見えない幽かな動き。

総会が、かつてより少し多めの皆さんに集まって頂けるようになり始めた、とある年。

そのことをやけに聞いてくる代があつて。そこから 1 年を経た同じ総会の場で、

前年より更に、その代の前後一団で集結してくれていて。

“きんやさん、やりましようよ、俺たちやりますよ！” との声。

年寄りの涙腺を攻める男たち。笑

そう、平成7年前後組。

実は自分が4年だけやった監督時代の選手たちでした。

当時3部から2部に上げてくれた奴ら。人生に縁。

そうは言っても、まだまだ重戦車に竹槍。

業者探しや見積りのし直し、アメフト、準硬との協議などは進むが、

その必要額の大きさを前に事はやはり捗々しくとはいかず。しばし一進一退。

そして、更に1年後の総会がやってくる。

OB戦のために早朝集まったアップグラウンドで、7年前後組の中では先輩格の6年エースストライカーから東京都サッカー協会による大型助成の話。

1億2千万の助成？ まじで？ 事が一気に動き出す。

でも今だから言える正直完全見切り発車。笑

その間、数年の間にもう1つ自分を本気にさせる出来事が。

グラウンド転貸による無期限活動停止。

不当だとの思いを押し殺して赤星君と共に学生支援課へ陳情。

当時の幹部教授が大学側のキーマンと分かるや、そのゼミテンOBに隠密同心を委嘱。笑

ゼミの宴会を探り当て、その近くの店（平成3年OGが営むワインバル「うららか」）で

2時間の待ち伏せ。でも、会って貰えず。その後の種々画策も実らず、

結果的には学生自治が基本としてOBの活動に不快感との声が漏れ聞こえ、表立っては自粛。

ただ今思えば、そこは方々の立場ゆえのポーカークフェイスだった気もして。

現役たちの健気な清掃活動、挨拶活動、地元ボランティア活動が少しずつ周囲の心を動かす。

当初無期限だった活動停止期間が10月になり、最終的には9月へ。

後期リーグに間に合う。一筋の可能性の光。

でも、まだそこにいた想定外のラスボス。都学連。

活動停止期間短縮が決まる大学評議会を特例的に夏休み中に開催してもらうが

後期リーグの手続き期限にワンタッチの差で間に合わず。リーグ開始からの復帰ならず。

ただ、まだそのタイミングでは1か月の手続き期間を経て最終2試合の参戦に可能性を残す。

2試合勝てば1部に残れる。

だが、最後は無情の結論。

そのことを議題とした都学連監督会議。

2試合のみの参戦は他校にとっては不公平、

後期全試合不戦敗とすべきと。事実上の降格確定。

分かるよ。頭では分かるけど、戦わせてあげたかった。

結果がどうなったかなんて分かんないけど、

出し切らせてあげたかった、グラウンド上で。



グラウンドの借りはグラウンドで返す。  
今思えば全くもって意味不明な決意。人に言わなくて良かった。笑

ただやはり簡単にはいかない。  
東京都サッカー協会の助成が、“外部の既得権はまかりならん”とのことで潰える。  
オープンイノベーションじゃねえのか、商学部。授業で学生には教えてんだろ。  
って、これは口に出しちゃってた。（申し訳ありません！ 笑）

でも点いた火は、それしきでは消えず。  
平成7年神谷、重満、中村、平成6年木村、平成どっちなんだ松井が猛然と動く。  
途中、サラリーマンの宿命に苛まれながらも。  
神谷君はシリコンバレーから、重満君はベトナムから、松井君は岡山から、  
最後まで活動し続けてくれました。感謝以外ない

そして捨てる神あれば。  
力強い推進力を加えてくれたアメフトの渡部さん、宇井さんが本格参戦。  
当時現役主将右田君のお父様にも深く感謝。  
そうこうするうちに各方面から励ましの声（とお金。笑）も届くようになり、ギアが上がる。  
加速、加速、加速。

令和3年3月30日。100周年に間に合った。  
もしかしたら、まあまあ奇跡に近かったかも。小学生の頃、散々親父に叱られた  
久々の自画自賛。笑 でも今回は心底言える。みんなのおかげ。

本当にありがとうございました。

コロナがもう少し収まったら、このグラウンドで100周年をやる。  
他のいろんな大学のようにホテルで式典とかはやらない。このグラウンドでやる。  
出来れば現役の影が薄くなるくらいOBOGに集まって欲しい。  
突然の大風呂敷？ それが出来たら、代表幹事のお仕事完結編で宜しいでしょうか？（えへへ）

令和3年5月2日。リーグ戦初戦 対東京都立大学 0-4

気にすんな、これからだ！  
ア式の本場の戦いは、ここから始まる。



東京都大学サッカーリーグ II 期			
昭和56年(1981)	1部	最下位:0勝7敗	1 亜細亜 2 学芸 3 慶応 4 学習院 5 立教 6 東大 7 成蹊 8 一橋
昭和57年(1982)	2部	4位:2勝4分1敗	1 東洋 2 上智 3 帝京 4 一橋 5 大東大 6 成城 7 自由 8 東工
昭和58年(1983)	2部	最下位:0勝3分4敗	1 帝京 2 亜細亜 3 国学院 4 東経 5 成城 6 成蹊 7 大東大 8 一橋
昭和59年(1984)	3部A	優勝:6勝1敗	1 一橋 2 東工 3 電機大 4 日大農獣 5 武蔵 6 水産大 7 農工 8 都留文
昭和60年(1985)	2部	5位:3勝1分3敗	1 東大 2 立教 3 亜細亜 4 帝京 5 一橋 6 成城 7 日大文理 8 武蔵工
昭和61年(1986)	2部	6位:2勝5敗	1 日大文理 2 帝京 3 立教 4 明学 5 亜細亜 6 一橋 7 大東大 8 成城
昭和62年(1987)	2部	3位:2勝3分2敗	1 明学 2 創価 3 一橋 4 玉川大 5 亜細亜 6 東洋 7 帝京 8 立教
昭和63年(1988)	2部	5位:2勝2分3敗	1 亜細亜 2 東洋 3 創価 4 帝京 5 一橋 6 国学院 7 武蔵 8 玉川大
平成1年(1989)	2部	最下位:0勝2分5敗	1 創価 2 帝京 3 武蔵 4 立教 5 上智 6 東洋 7 国学院 8 一橋
平成2年(1990)	3部A	優勝:5勝1分1敗	1 一橋 2 東工 3 農工 4 東経 5 日大農獣 6 高千穂 7 明薬 8 水産大
平成3年(1991)	3部A	5位:1勝4分2敗	1 農工 2 東工 3 東経 4 電通大 5 一橋 6 日大農獣 7 日大商 8 高千穂
平成4年(1992)	3部A	2位:4勝2分1敗	1 東工 2 一橋 3 東経 4 日大農獣 5 農工 6 電通大 7 日大商 8 水産大
平成5年(1993)	2部	7位:1勝2分4敗	1 上智 2 亜細亜 3 成蹊 4 大東大 5 成城 6 日大文理 7 一橋 8 学習院
平成6年(1994)	3部B	優勝:5勝2分0敗	1 一橋 2 自由 3 都立大 4 高千穂 5 武蔵 6 武蔵工 7 工学院 8 桜美林
平成7年(1995)	2部	5位:3勝1分3敗	1 日大文理 2 東経 3 東大 4 立教 5 一橋 6 帝京 7 明学 8 日大農獣
平成8年(1996)	2部	5位:3勝4敗	1 国学院 2 帝京 3 立教 4 大東大 5 一橋 6 東大 7 成蹊 8 東工
平成9年(1997)	2部	最下位:0勝3分4敗	1 学習院 2 大東大 3 朝鮮 4 立教 5 創価 6 東大 7 都立大 8 一橋
平成10年(1998)	3部A	優勝:6勝1敗	1 一橋 2 武蔵 3 明星 4 東工 5 山梨学院 6 電通大 7 武蔵工 8 水産大
平成11年(1999)	2部	6位:2勝1分4敗	1 帝京 2 立教 3 東大 4 大東大 5 成蹊 6 一橋 7 日大商 8 日大文理
平成12年(2000)	3部B	2位:5勝1敗	1 日大文理 2 一橋 3 外語 4 工学院 5 玉川大 6 桜美林 7 都立大 8 高千穂(兼権)
平成13年(2001)	3部B	5位:2勝2分3敗	1 成蹊 2 桜美林 3 玉川大 4 外語 5 一橋 6 山梨学院 7 都立大 8 工学院
平成14年(2002)	3部B	7位:1勝2分4敗	1 朝鮮 2 玉川大 3 大東大 4 桜美林 5 山梨学院 6 外語 7 一橋 8 農工
平成15年(2003)	4部C	優勝:6勝1分0敗	1 一橋 2 日大商 3 二松学舎 4 日獣畜 5 水産大 6 商船大 7 明薬 8 電通大
平成16年(2004)	3部B	4位:3勝2分2敗	1 理科大 2 東大 3 玉川大 4 一橋 5 大東大 6 電機大 7 山梨学院 8 工学院
平成17年(2005)	3部B	優勝:6勝1分0敗	1 一橋 2 桜美林 3 日大生資 4 大東大 5 山梨学院 6 杏林 7 東工 8 明星
平成18年(2006)	2部	4位:5勝2分2敗	1 東経 2 玉川大 3 東大 4 一橋 5 日大生資 6 上智 7 山梨 8 首都 9 桜美林 10 理科大
平成19年(2007)	2部	9位:1勝3分5敗	1 立教 2 学習院 3 明学 4 成城 5 東大 6 上智 7 日大生資 8 創価 9 一橋 10 日大商
平成20年(2008)	3部	3位:4勝3分1敗	1 首都 2 外語 3 一橋 4 日大商 5 大東大 6 農工 7 東工 8 杏林 9 明星 東薬(兼権)
平成21年(2009)	3部	3位:7勝2敗	1 山梨学院 2 大東大 3 一橋 4 日大商 5 創価 6 東工 7 農工 8 自由 9 都留文 10 杏林
平成22年(2010)	3部	3位:7勝2敗	1 日大商 2 創価 3 一橋 4 日大生資 5 東工 6 外語 7 自由 8 ICU 9 農工 10 明薬
平成23年(2011)	3部	2位:6勝1分2敗	1 首都 2 一橋 3 日大生資 4 東工 5 外語 6 桜美林 7 都留文 8 ICU 9 海洋大 10 自由
平成24年(2012)	2部	7位:4勝5敗	1 東経 2 帝京 3 上智 4 日大文理 5 首都 6 武蔵 7 一橋 8 創価 9 日大商 10 成城
平成25年(2013)	2部	4位:8勝6分4敗	1 成蹊 2 大東大 3 武蔵 4 一橋 5 上智 6 玉川大 7 学習院 8 日大文理 9 首都 10 日大生資
平成26年(2014)	2部	8位:6勝1分11敗	1 学習院 2 立教 3 玉川大 4 武蔵 5 創価 6 帝京 7 成城 8 一橋 9 日大文理 10 上智
平成27年(2015)	2部	5位:9勝1分8敗	1 東経 2 帝京 3 東大 4 武蔵 5 一橋 6 日大生資 7 玉川大 8 成城 9 創価 10 首都
平成28年(2016)	2部	2位:11勝3分4敗	1 成蹊 2 一橋 3 武蔵 4 上智 5 玉川大 6 学習院 7 成城 8 日大生資 9 理科大 10 山梨大
平成29年(2017)	1部	9位:3勝3分12敗	1 明学 2 立教 3 大東大 4 東経 5 山梨学院 6 成蹊 7 国学院 8 武蔵 9 一橋 10 帝京
平成30年(2018)	2部	5位:7勝4分7敗	1 東大 2 帝京 3 亜細亜 4 成城 5 一橋 6 玉川大 7 首都 8 武蔵 9 山梨大 10 理科大
令和1年(2019)	2部	4位:9勝2分7敗	1 朝鮮 2 成蹊 3 亜細亜 4 一橋 5 玉川大 6 武蔵 7 成城 8 首都 9 日大商 10 日大文理
令和2年(2020)	2部	6位:5勝2分6敗	1 亜細亜 2 東大 3 上智 4 玉川大 5 武蔵 6 一橋 7 成城 8 理科大 9 都立大 10 東工

## 9. 小平 G 人工芝化 ～ 未来へつなぐ

平成 24 年 (2012) ～ 令和 3 年 (2021)

### 平成24年 (2012)

西松会幹事会において「小平グラウンド人工芝化」の検討が始まる。  
中心となって動いたのは、安部裕二 (昭52卒) と倉崎嘉幸 (昭57卒)。

当初は必ずしも人工芝ありきではなく、グラウンドの改良、外部人工芝グラウンドの賃借、天然芝なども遡上に載せたが、検討の中で人工芝がベストであること、サッカーグラウンドだけの人工芝化では、強風の日など周囲の土や砂塵が人工芝の上に積もって劣化が早いことも分かり、アメリカンフットボールと準硬式野球のグラウンドも含めた、「全面人工芝化」の検討に進んだ。

しかし費用がネックとなる。

施工業者に小平グラウンドに来てもらい見積もりを依頼すると、最高品質の人工芝を使用すると約3.2億円、ランクの低い芝でも2.4億円を超えることが判明。OBの寄付に頼るにはあまりにも巨額で、人工芝プロジェクトは停滞を余儀なくされる。

### 平成27年 西松会総会プレゼン資料



#### (添付2)：見積もりサマリー

◆セット工事：サッカー 7690平米 + アメフト 8372平米

人工芝グレード	梅	竹	松
税抜き価格 (百万円)	244.0	281.0	319.0
20% オフ	195.2	224.8	255.2
面積按分 サッカー	93.5	107.6	122.2
面積按分 アメフト	101.74	117.17	133.02

◆単独工事：サッカー

人工芝グレード	梅	竹	松
税抜き価格 (百万円)	118.0	136.0	154.0
15% オフ	100.3	115.6	130.9
人工芝 平米単価 (円)	8600	10500	12500
セット割引率	93%	93%	93%

### 平成30年 (2018)

人工芝プロジェクトが再び、しかも一気に呵成に動き出す。

中心メンバーは平成7年卒業の、重満紀章、神谷佳典、松井伸太郎。

プロジェクトの進捗状況が好転した1つの理由は、人工芝の価格が下がったこと。小中学校など公的グラウンドの需要が増え、輸入に頼っていた人工芝の国内生産が可能になり、3年前は最高ランク3.2億円だった見積もりが、2.4億円にまで大幅に低減したのである。

さらに施工費用をアメフト部と折半することも正式に決まり、サッカー部負担は1.2億円となる。一方で「東京都サッカー協会」から時間貸しと夜間照明の設置を条件に、億単位の寄付の申し出もあった。大学側との調整・交渉が必要だが朗報には違いなく、小平グラウンド人工芝化は、長年の〈夢〉から実現可能な〈目標〉となる。

### 平成31年 - 令和1年 (2019)

1月12日に開催された西松会総会で、小平グラウンド人工芝化に向けての「寄付金募集活動」が正式に承認される。目標の1.2億円に対して、総勢500名のOB・OGの6割＝300名の協力が得られると想定し、1人当たり40万円の推奨額を設定。若手OBも参画できるよう1口2万円とする。

東京都サッカー協会から最大1.2億円支援の話を受け、大学側と交渉を続けるが、外部団体への貸し出しと夜間使用に難色を示す姿勢は変わらず、10月の幹事会で断念することを決定した。同月、アメフト部も寄付募集を開始。

12月、施工業者4社のプレゼンを実施。再見積もりによって総額は1.5億円に低減され、サッカー部の負担額は7,500万円となる。年末までの寄付総額は5,500万円を超え、目標額の7割目に達する。

### 令和2年 (2020)

8月、施工業社を2社に絞って最終コンペを行い、「日本体育施設株式会社」に決定。施工費用の最終見積もりが1.2億円となる。

7月末までに集まった寄付金は6,845万円で、アメフト部と合わせると1.3億円となり施工に必要な金額を確保することができた。

9月、大学側の承認を得て、正式に発注する。



12月1日から工事が始まる。

樹木・雑草の除去、やぐら・散水機・転圧機など残置物の撤去、整地と排水設備の改修、そして人工芝の敷設。施工期間は4ヶ月。長年の夢が実現するのだ。



12月中旬、排水設備の改修工事が進む。サッカーグラウンドの外周に側溝が新設され、ほとんどが壊れて使えなくなっていた散水用のレインガンやスプリンクラーは撤去された。

「小平湖」と「小平砂漠」に悩まされることは、もうない。

土のグラウンドに刻んだ思い出は遠ざかり、夢は近づく。寂しさと嬉しさが、去来する。



下の写真は、人工芝の下に敷く「板状暗渠シート（面状排水材）」。  
 降雨の際、浸透した雨水を外周の側溝へと導く「導水管」の役割を果たす。  
 管ではなく板状であるが、中に水の流れる空隙があり、5 m間隔で魚の骨状に設置し、  
 その上に砂利を敷いて舗装する。



## 令和3年(2021)

2月12日、ついに待ちに待った日が来た。

1枚ずつ接着と縫合で繋ぎ合わせたロール状の人工芝が、グラウンドの上に丁寧に敷かれていく。まるで緑の絨毯のよう。1週間後には真っ白なライン芝も敷き込まれた。



3月初旬、人工芝の敷設工事が全て終了し、真新しいゴールが設置される。  
サッカーグラウンドのサイズも 96m × 63m から 102m × 68m へと、かなり拡張された。  
そしてボロボロだったシュート板も、50年ぶりに新調される。



年明け早々から再び発出されていた緊急事態宣言が3月21日に解除され、翌22日から現役部員たちは、人工芝に生まれ変わった小平グラウンドで練習を開始した。本年度から監督に就任した戸田和幸氏と共に、部員たちは次の100年に向かって走り始めた。一橋大学ア式蹴球部の未来が実り多きものとなることを願い、本書を締め括ることとする。



## 《小平G人工芝化プロジェクト》

## 寄付者名簿

★故 神野光司	昭11卒	★松崎 和男	昭43卒	★福本 浩	昭52卒
令息 神野匡司		★有田 稔	昭44卒	★村上 仁	昭52卒
★石井 徹	昭30卒	★佐藤 哲太郎	昭44卒	★山根 言一	昭52卒
★故 志摩 憲一	昭31卒	★清水 幸男	昭44卒	★浅井 幸一	昭53卒
★橋本 昭一	昭31卒	★内村 透	昭45卒	★栗原 仁	昭53卒
★松丸 鉦市	昭31卒	★渡辺 恵	昭45卒	★小林 治	昭53卒
★岩坂 朔郎	昭33卒	★宇野 哲夫	昭46卒	★佐藤 嘉明	昭53卒
★小野 輝夫	昭35卒	★江見 吉信	昭46卒	★加藤 幸雄	昭54卒
★斎藤 哲雄	昭35卒	★川合 哲	昭46卒	★高槌 宏敦	昭54卒
★古河 洋	昭35卒	★小島 收	昭46卒	★五座 哲也	昭54卒
★三田 達也	昭35卒	★竿代 興志	昭46卒	★佐藤 博子	昭54卒
★鎗田 良昭	昭35卒	★柴田 暁	昭46卒	★鈴木 茂	昭54卒
★飯沼 八洲彦	昭36卒	★関 榮一	昭46卒	★故 山原 義彦	昭54卒
★今村 秋夫	昭36卒	★丸杉 孝三郎	昭46卒	令室 山原恵子	
★小林 成古	昭36卒	★吉川 敏一	昭46卒	★高野 啓太	昭54卒
★高柳 雄一	昭36卒	★宮内 正敬	昭47卒	★匿名	昭55卒
★土井 鼎	昭36卒	★押本 俊明	昭48卒	★小田切 康子	昭55卒 (部外)
★村上 信勝	昭36卒	★矢尾板 健二	昭48卒	★種岡 瑞穂	昭55卒
★秋山 和夫	昭37卒	★大島 正	昭49卒	★吉田 愼二	昭55卒
★清水 邦男	昭37卒	★緒方 徹	昭49卒	★大倉 治彦	昭56卒
★瀬戸 泰	昭37卒	★小山 修	昭49卒	★太田 勝之	昭56卒
★日巻 久匂男	昭37卒	★杉山 正敏	昭49卒	★桜井 真二	昭56卒
★川村 英夫	昭38卒	★高垣 健治	昭49卒	★田口 聡	昭56卒
★池田 致	昭39卒	★古市 正興	昭49卒	★武田 治基	昭56卒
★故 石綿 浩之	昭39卒	★松沼 英昭	昭49卒	★橋詰 邦弘	昭56卒
令室 石橋信子		★山崎 彰人	昭49卒	★日置 慶太	昭56卒
★匿名	昭39卒	★宇田 均	昭50卒	★船倉 洋一	昭56卒
★斎藤 国雄	昭39卒	★内田 守	昭50卒	★伊地知 嗣典	昭57卒
★匿名	昭39卒	★笠間 昭彦	昭50卒	★切畑 年生	昭57卒
★松島 源吉	昭39卒	★阿部 匡順	昭51卒	★倉崎 嘉幸	昭57卒
★匿名	昭39卒	★木内 秀行	昭51卒	★都竹 一郎	昭58卒
★白石 治紀	昭40卒	★北出 晃	昭51卒	★伊藤 史郎	昭58卒
★寺西 重郎	昭40卒	★河内 純一郎	昭51卒	★岩田 淳一	昭58卒
★永山 在紀	昭40卒	★佐藤 健太郎	昭51卒	★須藤 英夫	昭58卒
★故 清水 征四郎	昭41卒	★瀬川 雄二	昭51卒	★畑 弘志	昭58卒
令室 清水千代子		★高橋 良多	昭51卒	★松永 隆	昭58卒
★田中 好輔	昭41卒	★谷口 伸一	昭51卒	★小澤 忠司	昭59卒
★栗又 俊二	昭42卒	★故 安部 裕二	昭52卒	★久木田 正樹	昭59卒
★小林 純一	昭43卒	令息 安部泰輔		★島田 喜広	昭59卒
★高場 恭幸	昭43卒	★木村 武志	昭52卒	★高木 泰三郎	昭59卒
★高峯 文世	昭43卒	★篠崎 信弘	昭52卒	★中隈 和夫	昭59卒
★馬場 達夫	昭43卒	★土方 周明	昭52卒	★樋口 哲司	昭59卒

★山木 達生	昭59卒	★劔持 隆雄	平7卒	★西村 聡	平20卒
★尾仲 秀次	昭60卒	★西郷 行保	平7卒	★倉田 崇之	平21卒
★山部 信太郎	昭60卒	★重満 紀章	平7卒	★高田 光大	平21卒
★桑原 隆人	昭61卒	★中村 進	平7卒	★高橋 (坂本) 明子	平21卒
★谷口 浩	昭61卒	★永山 研一	平7卒	★柳田 (湊) 麻理子	平21卒
★匿名	昭61卒	★橋口 晴彦	平7卒	★阿部 真琴	平22卒
★福田 正司	昭61卒	★松井 伸太郎	平7卒	★高橋 悠基	平22卒
★村上 浩三	昭61卒	★吉崎 正彦	平7卒	★藤井 翔	平22卒
★朝原 丈雄	昭62卒	★徳重 泰治	平8卒	★山田 雄之助	平22卒
★寺田 広志	昭62卒	★中村 克	平8卒	★小林 悠二	平23卒
★安楽 哲郎	昭63卒	★深田 道就	平8卒	★星 達也	平23卒
★松井 浩通	昭63卒	★宇津野 智哉	平9卒	★砂子 達也	平23卒
★柳田 浩孝	昭63卒	★志村 亮	平9卒	★横溝 英大	平24卒
★桎原 隆	平1卒	★鈴木 仁也	平9卒	★植村 康太	平24卒
★金谷 斎	平1卒	★高橋 伸介	平9卒	★彦坂 達哉	平25卒
★栗谷 信裕	平1卒	★前田 健	平9卒	★稻垣 文佳	平26卒
★藤井 徹也	平1卒	★町塚 栄介	平9卒	★大倉 裕介	平26卒
★皆川 雅則	平1卒	★西 英俊	平9卒	★小野 博充	平26卒
★山崎 真	平1卒	★香取 健太郎	平10卒	★小林 茜	平26卒
★諏訪部 伸吾	平2卒	★丹尾 彰彦	平10卒	★田代 健太	平26卒
★西川 一郎	平2卒	★角井 朋之	平11卒	★大山 航輝	平27卒
★村尾 祐一	平2卒	★進藤 潤耶	平11卒	★川副 陽平	平27卒
★赤井 伸彦	平3卒	★青井 威文	平12卒	★田中 克弥	平27卒
★岡本 正	平3卒	★佐次 徹也	平13卒	★中村 瞭	平27卒
★高原 明子	平3卒	★阿島 友昭	平14卒	★満井 一成	平27卒
★袴田 守一	平3卒	★岡田 薫	平14卒	★小島 秀太	平28卒
★赤星 真一	平4卒	★須田 尚宏	平14卒	★竹本 圭祐	平28卒
★川上 耕	平4卒	★塚田 陽一郎	平14卒	★匿名	平28卒
★本橋 聡	平4卒	★日影 武也	平14卒	★蓮池 就介	平28卒
★安部 太郎	平5卒	★森松 央志	平14卒	★梶谷 卓矢	平29卒
★大石 嘉彦	平5卒	★稻垣 祐三	平15卒	★榊原 龍斗	平29卒
★三枝 正人	平5卒	★大久保 穰	平15卒	★中野 圭佑	平29卒
★守田 稔	平5卒	★高橋 進	平15卒	★藤原 慧	平30卒
★池内 久泰	平6卒	★林 良二郎	平16卒	★手島 拳之介	平30卒
★小野田 博文	平6卒	★林 健一郎	平17卒	★船越 弘晃	平30卒
★木村 義幸	平6卒	★前田 和也	平17卒	★松井 基宏	平30卒
★栗原 博昭	平6卒	★杉本 達朗	平18卒	★吉川 健也	平30卒
★向畑 哲也	平6卒	★門司 陽平	平18卒	★吉田 圭吾	平30卒
★宮崎 弘喜	平6卒	★山盛 貴史	平18卒	★池田 真	平31卒
★粟津 義一	平7卒	★越後屋 真澄	平19卒	★加賀 平朗	平31卒
★井上 健一	平7卒	★溝端 清悟	平19卒	★塩月 航輝	平31卒
★大場 恒和	平7卒	★石井 崇弘	平20卒	★田尻 一真	平31卒
★尾崎 真	平7卒	★伊藤 菜帆	平20卒	★田中 才輝	平31卒
★神谷 佳典	平7卒	★乙黒 絵里	平20卒	★七條 毅	父兄
★北野 勇樹	平7卒 (部外)	★佐藤 怜	平20卒	★右田 靖幸	父兄

## あとがき

本書は一橋大学ア式蹴球部 100 周年の記念誌として制作され、

『100 年史 Vol.1 沿革』と『100 年史 Vol.2 戦記』の 2 部構成になっています。  
準備稿として最初の記事「100 年史① ～ 草創期」を西松会新聞 Website に掲載したのは  
2019 年 1 月のこと。それから 2 年半の歳月を経て、ようやく発刊に至ることができました。

『沿革』は写真をたくさん使いながら、我が部が歩んできた 100 年の刻の流れを  
わかりやすく生き生きと伝えたい、そんな思いで編纂しました。

『戦記』については、単にリーグ戦の記録だけでなく、およそ 800 名に及ぶ  
歴代サッカー部員の写真を、可能な限り全員載せることに腐心しました。  
その一人ひとりの表情にも 100 年の変遷が感じられると思います。

2 冊の『100 年史』を編纂するにあたり、  
大いに役立ったのは、部誌『蹴球』と『60 年史』です。  
パソコン・携帯電話・メールも無い時代に、よくこれだけの原稿と写真を集めたものです。  
貴重な記録と記憶を後世に残してくれた大先輩方の努力には、敬意と感謝しかありません。

また一橋大学 学園史資料室の小幡英樹氏には、  
『一橋大学年譜』や『一橋大学五十年史』、『如水会報』に掲載された松本大先輩の遺稿など  
数多くの古い資料をご提供いただき、不明だった幾つかの事実が判明しました。  
そして「一橋いしぶみの会」の竹内雄介氏、一橋大学経済研究所の野村由美氏にも  
資料協力をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さらに『60 年史』以降の沿革と戦記については、  
OB 有志の方々が送ってくださった各年代のチーム情報、シーズンを総括する記事、  
リーグ戦の公式プログラムを参考にして編纂しました。皆様のご協力にも感謝いたします。

ただコロナ禍という状況もあり、リーグ戦に関する古い資料の発掘と確認が十分にできず、  
記録が不詳あるいはOBの記憶に頼ったままの年代が多々あることをご容赦ください。  
今後の調査によって判明すれば、随時、西松会新聞 Website に追記していくつもりです。  
最後に、この『100 年史』が西松会のさらなる発展と会員の交流を促進し、  
現在および未来の部員たちの一助となることを願ってやみません。

令和 3 年 4 月 25 日

西松会新聞編集長 福本 浩 (昭52卒) 記

### 【参考および引用資料】

- \* 部誌『蹴球』第1巻～第9巻（昭和9年～16年刊・昭和57年復刊）
- \* 『一橋大学ア式蹴球部60年史』（昭和57年2月24日刊）
- \* 『松本正雄先輩を偲ぶ』（平成8年12月1日刊）
- \* OB諸氏の所蔵写真  
.....
- \* 東京商科大学一橋會編『一橋五十年史』（大正14年9月22日刊）
- \* 『写真集 一橋大学百年』財界評論新社出版（昭和56年5月30日刊）
- \* 『東京商科大学予科の精神と風土』大澤俊夫著（平成17年12月刊）
- \* 松本正雄「西松会と一橋サッカー部のこと」～『如水会報 No.486』（昭和45年10月刊）  
.....
- \* 歴代の卒業アルバム（一橋大学附属図書館所蔵）
- \* 東京都大学サッカーリーグ 公式プログラム（OB諸氏所蔵）  
.....
- \* 『東京大学のサッカー 闘魂90年の軌跡』（平成20年12月19日刊）
- \* 『東京都サッカー協会五十年史』（平成8年9月14日刊）

### 【資料協力】

- \* 小幡 英樹 一橋大学 学園史資料室
- \* 竹内 雄介 一橋いしぶみの会 世話人代表 昭49卒
- \* 野村 由美 一橋大学経済研究所 昭60卒





一橋大学ア式蹴球部 100年史 Vol.1 沿革

令和3年6月28日 発行 (非売品)

発行者 西松会

会長 緒方 徹

編集人 西松会新聞編集長 福本 浩

装 丁 辻 聡

制 作 出窓社

